

# 香葉

創立50周年記念号



1996

NO. 25

## 目 次

講演会への御案内	1
会長あいさつ	古 城 房 子 2
学長あいさつ	小 玉 敏 子 3
50周年式典・記念音楽会	4
女専のページ	6
アメリカ在住の旧友を訪ねて	16
覚え書 ー23ー	上 市 二 郎 20
創立の頃	25
故人を偲んで	28
佐伯輝子先生講演会要約	松 野 トシ子 33
林先生の叙勲	和 田 淑 子 35
クラス会報告	36
国文科30周年の集い	38
奨学生から	39
県央のつどい	高 田 喜 八 40
合同同窓会報告	相 吉 典 子 41
母校ニュース	42
決算・予算	43
賛助金報告	44

表 紙……………関 頼 武

カット……………漫画 研 究 部



## 『大塚 野百合先生 講演会』

48年に亙り、大学教授として英語、アメリカ史を講じ、女子教育に尽くされた先生は、最近ラジオでご活躍中です。面白いお話をご期待下さい。

テーマ：『幸福について』 —文学と賛美歌をめぐって—



日 時：1996年11月3日(日)  
13:00～

場 所：図書館棟5F視聴覚教室

《講師の紹介》

東京都出身

早稲田大学文学部卒業

米国クラーク大学大学院修士コース卒業

イエール大学神学部研究員

1948～1950 関東学院女子専門学校教授

1952～1988 恵泉学園短大教授

1988～1994 恵泉学園大学教授

現 在 昭和女子大非常勤講師

《主な著作》

\*生きがいの人生論

\*老いについて——豊かな人生を考える64冊

\*賛美歌・聖書ものがたり——疲れしころをなぐさむる愛よ

今までの講演・演奏者名です。(敬称略)

1985 永井 路子

1986 鳥飼玖美子

1987 田中喜美子

1988 関東学院中・高等学校

ハンドベル・クワイヤ

1989 宮崎 安子

1990 吉武 輝子

1991 吉屋 敬

1992 円 より子

1993 呉 善花

1994 大庭みな子

1995 佐伯 輝子

### ★香葉会の部屋★ご案内

卒業生と在校生、教職員の交流の場として、又卒業生の部屋として3号館106号室にて、コーヒーとお菓子のサービスをいたします。お友達同志・ご家族お誘い合わせの上お立ち寄り下さい。

※ 11月3日・4日 両日とも開室いたしております。

※ クリスマスリース・小物等の販売もいたします。

# 短大五〇年の歩みと香葉会

会長 古城 房子



古城会長

相吉副会長

本年は、女子専門学校が設立されて五十年になり、六月一日に記念式典と記念音楽会が盛大に行われました。姉妹校であるオタワ大学と、フランクリン大学の学長も参列され、祝辞を述べられました。昔の卒業生、特に女専の方達が大勢いらして下さって、本当に嬉しいことでした。レセプションでは、偶々来

日中の、カンサスシティ在住のワグナー美與さん(旧柴田・女専英2)もご挨拶をして下さいました。音楽会は二期会のオペラ歌手であり芸大教授の鈴木寛一氏のコンサートを楽しみましたが、一部の伴奏者は、幼教の卒業生で現在、エリザベート音楽院でパイプオルガン演奏者として研修を積んでおられる建石直子さんでした。

この日に一番お迎えしたかった元学長の相川先生、小滝先生、兵藤先生その他、創立当時苦勞をされながら今の短大の基礎を作って下さった先生方が亡くなられて、共に祝うことができなかったのが本当に残念でした。

六月二十九日には前学長の林淳三先生の叙勲のお祝いの会が催されました。香葉会は相川先生の肝入りで誕生しましたが、育つ過程で強力な助っ人だったのは林先生でした。発足当時は庶務課に随分お世話になり、足手まといになっていたと思いますが、どうやら独り立ちして活躍を続けることができたのは林先生が、同窓会の育成を重要と考えて下さって学校ぐるみで支援と協力をして下さったお蔭で、二十五年の間に少しずつ、力を付けてくることができました。今年は何〇二名の新入会員を迎え、新しい歩みを始めており

ます。

この「香葉」を五〇周年記念特集として、お届けできることを嬉しく思っております。

これからも、よろしくご意見、ご感想をお寄せ下さい。  
(短英1)



左から 門根先生、小濱さん(短英2)、会長

## 短大の近況

学長 小玉 敏子



早いもので、私の「短大の近況」はこれで四回目になります。本年八月末で学長職は任期満了となりますので、これが最後でございます。

六月一日、関東学院女子教育五十周年記念式が執り行われました。短大の前身、関東

学院女子専門学校が創設されてから満五十年が経過したということです。一八八四年に創設された横浜バプテスト神学校も、一八九五年に開設された東京中院も、一九一九年三春台に開設された中学院東学院も、アメリカ北部バプテストの宣教師が、男子のために開設した学校でした。関東学院が女子教育を始めたのは第二次大戦後、女子専門学校が開設された時で、学制改革により男女共学の中学校が発足したのは、翌一九四七年でした。

この記念式典には短大の姉妹校、米国カンザス州オタワ大学のハロルド・ガーマー学長と、この日姉妹校協定書に署名されたインディアナ州フランクリン大学のウィリアム・マーティン学長も出席され、祝辞を述べられました。ちなみに、両大学には女子専門学校の第一回卒業生が留学しております。式典出席者は学院関係者のほか県内の短大や高等学校などから約二百五十名でした。

式典に引き続いて体育館で行われました祝賀会において、香葉会

から二百万円のご寄付を頂戴いたしました。同窓会の皆様の母校に對するご支援を心から感謝申し上げます。

午後には香葉会と共催で記念音楽会を催しました。鈴木寛一・東京芸術大学教授によるヨーロッパと日本の歌曲などで、ピアノ伴奏は多田聡子・東京芸大非常勤講師、オルガン伴奏は建石直子さん（幼児教育科卒、エリザベート音楽大学大学院在学中）でした。また当日は、家政科生活文化専攻および幼児教育科の学生の作品や短大の出版物などのほかに、故兵藤正之助先生の令夫人兵藤君枝氏から寄贈された十五点の日本画も展示されました。

この日に間に合うように、写真集『関東学院女子教育五〇年の歩み』が編集されました。矢嶋道文教授が、多くの方たちの協力を得て、惜しみなく時間と労力を費やして仕上げてくださいました。

本学の歴史の節目の年である今年には、世代交代を感じさせる年でもあります。昨年九月に兵藤正之助先生が、十二月に相川高秋先生が亡くなられ、今年二月に相川先生の短大葬が、三月に兵藤先生を偲ぶ会が行われました。そして六月に小滝奎子先生が亡くなられました。また、来年三月、英文科の宮川喜代江教授と私、国文科の岡松和夫教授、幼児教育科の丸山昭一教授、経営情報科の板垣綏教授が定年を迎えます。

五学科三専攻に二千名近い学生を擁する、神奈川県で一番大きい短大に成長した本学ではありますが、十八歳人口の急減、女子の四年制大学志向、臨時定員の削減などの問題を抱えて、将来は必ずしも明るくありません。改組やリストラを実行しなければならぬかもしれません。今後ともご支援下さいますようお願い申し上げます。

(平八・七・八記)

# 創立50周年式典・記念音楽会

記念式

## 式典に参加して

このたびの関東学院女子教育五十周年記念式典に出席させて戴き、女専第一回同窓生として深い感銘を受けました。

立派に発展した母校のチャペルの中に身をおいて、在学当時に思いする中、穏やかな安らぎと充実を覚え、無事にこの日を迎え参加できたこと、感謝の気持ちで一杯になりました。

而し、母校の諸先生方とて唯方も存じ上げず半世紀の時の流れも痛感致しました。

思えば当日の出席者の中で五十年前の六月一日、三春台に居合わせた方が何人いられたでしょうか？ 安藤先生・上市氏・松本さん・女専一回生と予科生・他に学院役員の方はいらしたのかしら？ 屈指の数だったので：そう思うと何か貴重な経験をした様な気持ちです。

六十周年に参加する自信は全くありませんが、もしそれができたら最高と、今日から目

標に生きて行くつもりです。

(出席者のお便りから)





## 五十周年記念音楽会

二期会のオペラ歌手、鈴木寛一氏を迎え、ピアニストに多田聡子さん。パイプオルガンに卒業生の建石直子さん（幼教18）の演奏で、午後のひとつきを、学生たちとともに楽しみました。建石さんには伴奏とはいえ、パイプオルガンでの響きを、チャペルに鳴り渡らせその旋律の上を鈴木寛一氏によるテノールが渡っていくようでした。記念音楽会に卒業生が出演されることは、卒業生にとって、とても嬉しいことだと思います。



# 女専のページ

熊追橋

鶴見 愛子

今年は関東学院に女専が出来て五十年目の記念すべき年であると聞く。十年一昔と言う五十年はその五倍。五つの昔を経たと知り、第一回生は何を思うだろう。人それぞれに、それぞれの「紫陽花いろ」の己が歴史を振り返って年月の流れの速さを思い知るのだろうか。私事を言えば、この半世紀を、本人は何時多大真面目で一所懸命やっているつもりだが、結局は空まわりで、トンと実績が伴わないといった工合で過していった。そんな訳で改めて口幅つたい事を言ったり書いたり出来かねる次第だ。そこで、極く慎しやかに、ホンの一寸、身边雑記を試みたのだが……。

公務員だった夫の転勤で曾て札幌に住んだ折、北海道の自然美に魅せられたのと、現在における家族間の事情と相俟って、夫の退職後、定住を期して札幌に移り住んだのは六年前のことだった。

その翌る年の秋の一日、夫の運転する車で孫（男の子、当時五才）を連れて紅葉見物に出かけた。北海道の秋は途微もなく短い。僅か二、三週間で終る年もある。内地、特に京都などでは、燃える様な真紅の紅葉が多いが、ここ北海道では橙色や黄色の葉の方が多い。それでも山々のたたずみ所、全山、錦織の様相を呈して美しい。なだれを打つ様に、頂から谷底や山裾をめぐり、もみじ葉、こがね葉、入り交じり、重なり合って、うねりつつ広がり下っていく壮観は見事である。

それが或る時、一夜、突然に吹雪いて、折角の紅葉を大半、雪が蔽って了う。それはそれで、一種の景観で、朱と黄と白の織り交ぜの妙を楽しめるのだが、それもせいぜい数日間、あとはアツと言う間に、黒い冬枯れの木立に様変わりして了う。従って、紅葉見物はタイミングを逸してはならない。

幼児連れの行楽とあって、手近の、札幌から北へ約七十軒の桂沢湖に遊んだ。湖と言っても、ダム用の人造湖で、さほど大きくはない。近くから恐竜の骨が出た事があり、それを記念して湖の畔に恐竜の像が立っている。孫は恐竜の尻尾に触ったり、野草を摘んで遊び、中老夫婦は、よく晴れた空を映して真青

な湖面に描かれた秋山の装いを満喫してから帰路についた。

帰りは逆コースの裏道を通り、往きとは異なった山の彩色を楽しもうと、細いダート道を選んだ。あまり人も車も通らぬ裏道から見る山々のたたずまいも又、格別で見飽きることはない。途中、小さな谷間に、垂れた紅葉の枝をくぐって溪流が流れ、その上に長さ三メートル程の小さな橋がかかっていた。そこで一旦車を降り、せせらぎの音に耳を澄ました。薄い雲が広がり始め、うつすらと夕方の気配が漂い、それがひっそりとした辺りの風景によく合った。よく見ると、橋の柱に「熊追橋」と名が書いてある。

「これは熊を追いかけた時の橋かしらん。それとも熊に追い詰められた時の橋と言う意味かしらん。」

と、言い出したことから、今年は冷夏だったので、山に木の実が少なく、餌に困った熊が人里近く下りて来ている、と書かれた最近の新聞記事を思い出した。どこかのお年寄りが細道を歩いていて、後から肩を叩かれ、誰かと思つて振り向いたら、熊が二本足で立っていた、という話も聞いた。幸い、この熊は満腹だったらしく、お年寄りは無事だったと



か……。ふと前方を見た私は、自分の顔が引きつったのが分かった。見よ。登り坂になっている一本道の遙か最先端、丁度道の登り切った所に、黒い一点が現れ、それが次第に大きくなって、此方へ向かって来る。目をこらして見ると、白い砂埃の中に熊が一匹駆けてい

るではないか。

「熊ッ。」  
と言ったきり、絶句して、前方を指差すと、夫の顔はみるみるうちに硬直した。とっさの間に、無心に小石を拾っては、背伸びして、橋の欄干から首を出して、溪流に投げている孫を、無言で車に押し入れ、続いて二人も慌

てて車に乗り込み、息をひそめた。このまま真直ぐに車を進めれば、狭い道であるから、熊と正面衝突してう。バックすれば溪流に落ちる危険がある。正に進退谷まった。

熊が前足で殴ると、フロントガラスなど、一たまりもなく木っ葉微塵だと言う。きつとあの熊は飢えている。それで私達を良き獲物

と思って、ひた走って来るのだと確信した。お昼の弁当を全部平げなければ良かったと返らぬ後悔をした。握り飯があれば、それを投げて、熊が食ひ食べている中に逃げ出す事も出来たのに……。何か食物が残っていないか

と、血走った目で車内を見廻した。何も無い。絶望だ！私達の恐怖も知らぬ氣に、孫はウルトラマンの人形で遊び乍ら、鼻歌を歌っている。この子が見渡したところ、一番美味しうだけど、未来は宇宙飛行士かピアニストになりたいと夢を描いている幼児を、まさか「いけにえ」に出す訳にはいかない。夫は夫で、孫を我が家まで車で連れ帰る義務と能力がある。それにひきかえ、たと太っているだけで、運転も出来ない自分は、此の際、最も存在価値の低い者であると納得した。エイ、まゝよ。私が餌食になる他に手だては無いと決心した。

その時、勃然と、時と場所柄もわきまえず、以前、法隆寺で観た玉虫厨子が脳裏に浮かん

だ。厨子の側面に描かれた画は、「捨身飼虎図」で、自分の身を投じて飢えた虎を養うの図である。内容の凄惨さに反して、繊細な優美な画面である。殊に虎の口に投じる姿は、

ひらひらと、まるで柳の葉のように軽やかで、

しなやかで、且、スマートである。連鎖的に

「捨肥身飼熊図」として、己が熊に身を投じる図柄が見えたが、悲しい哉、玉虫厨子に描かれた美的要素は探すべくもない。

熊を養った後の私の死骸はどんな工合だらう。あらゆるない姿だったら恥かしい。以前

羅臼に現れた熊は、民家の台所に這入りこみ冷蔵庫を開け、中の食物を食い尽くした後で、食物の入っていた皿、小鉢を五、六枚重ねて片付けて帰ったと言う。実際、熊が重ねた皿をテレビのニュースでも観た。今日の熊も片付け魔で、私の遺体をきちんと疊んで行つてくれるといいが……と、書けば長いが、こんな思いが一瞬のうちに私の頭をよぎった。

そんな私の内心の葛藤をよそに、熊は土煙と共に近づきつつある。私はドアに手をかけ、熊の顔がフロントガラスを覗いた瞬間、間髪を入れず転がり出ようと身構えた。目を閉じ、心の中で家族に別れを告げた。それでいて尚、熊が車は食用に適しないと認識して、素通りしてくるよう、未練がましく祈るのも忘れなかつた。

何かが、ごうごうと音をたてて、車の傍を走り抜けた。もしやと、かすかな期待をこめて目を開いた。いない。熊が消えた。窓からカーッと赤い大口を開けて覗いている筈なのに。あるものは、もうもうたる土煙だけ。

「アッ。蜜蜂だ。」

と、孫が叫んで後部窓にしがみつき、巻き起つた土煙を見送っている。見れば、土埃に囲ま

れて、大きな黒い塊が走り去って行く。ナン  
ト、熊にはあらず、蜜蜂であつたるか!! 北  
海道でだけかどうか知らぬが、ブンブン、オー  
トバイで走り廻る若者を、その音から連想し  
て、通称、蜜蜂と呼ぶそう。熊と思つたの  
は、黒いオートバイに跨つた黒ジャンパーの  
若者だつた。

瞬時にして、緊迫感が吹っ飛んだ。関西風  
に言えば、「なあんや、アホクサ」である。  
因みに、夫も私もかなりの近眼で、其の頃、  
既に視力が大分弱くなつていたのでつた。

恐怖と決死の呪縛が解けて、車は勢いよく  
スタートして、「熊追橋」を後にした。折し  
も、雲が流れ去つて、夕陽が眩しくきらめい  
た。  
秋の夕陽に照る山もみじい。  
と、歌い乍ら、安らかに家路を急いだのであつ  
た。(女専英一)

## 関東学院に生まれて半世紀が――

徐 多恵子

鎌倉の谷戸に住みついたので息子が二才の  
時でした。以来四季折々の移り変わる風情を  
楽しみつつ、既に三十年の月日が流れました。  
そして一昨年主人を見送つて、より一層過ぎ  
来し方を思いめぐらす毎日です。近況でも良  
いからとのご依頼を受けペンを取りました。  
三春台の坂道をかけ足で登つた若き日ははる  
かに遠く過ぎ去つた五十年、勿論様々な思い  
で一杯ですが、個人的には学院に対して、  
只々言葉に盡くせませぬ感謝があるのみです。  
それは、私をはじめ、ステップサンが三人と  
私の息子が、それぞれ中・高・大・大学院ま  
で共にお世話になりました。此の五十年間、  
私の中にいつも何處かで関東学院がありまし  
た。そして今回、神様が見えない糸を結んで  
下さり、短大英文科より大学三年に編入学さ  
れ、今春卒業された濱松美和さんというお嬢  
さんと息子とのご縁がまとまつたのも松本昌  
子牧師先生のお口添えでした。このような私  
事を敢えてご披露するのは躊躇ためらひましたが、  
自然の成り行きで我が家に又関東学院子が一  
人増えましたことと、私が第一回シエークス

ピア劇で、ヴェニスの商人のポーシャをやら  
せて頂きましたが、初めてお会いした時に、  
美和さんも大学の演劇部で「真夏の夜の夢」  
を演じられたとの事、言えは私は大先輩とい  
うことですっかりお話がはずみ、関東学院を  
通して、シエークスピアを通してのご縁だつ  
たと感慨ひとしおです。何よりも今、主人が  
居てくれたらと思うばかりです。三回忌に  
「臘梅によせて」と題した拙い歌集らしき追  
悼誌を出しました。百首の内の三首ほどのせ  
させて頂きます。

みまかりし 一日のこと夢のこと

ふたとせ終るも 昨日の如く

臘梅を 賞うらめし主人の今は亡く

季節を知りて 嘆なげくも悲しく

振り返る 喜怒哀楽の幾年も

夢と消えゆき 我も年古る

私共一族は関東学院に生まれた家族です。  
そして今後も！短大を含めた学院の益々のご  
発展を祈念申し上げ、改めて心からの感謝を！

(女専英一)



第1回 シェイクスピア劇



柳生先生の授業風景



## 点訳奉仕を続けて

澄谷 亮子

点訳を始めたのが一九七五年ですので、もう二十年以上たちました。何か世の中のお役に立ちたいと思い、自分の好きな「言葉」と云うものを通して道を探り、点字にめぐりありました。相性(?)がよろしかったらしく、すんなりと基礎をマスター出来ました。毎年点字図書館では点字講習会を開き、何十人も受講しますが、点訳者となるのは、一人か二人と、ほんの僅かです。複雑な約束事が多いので、早い人は一回目の講習を受けて、その面倒さにあきらめてしまいます。

打つのは容易ではありませんが、触読する盲人の方々の苦勞は、もっともっと大変でしょう。ある調査では、一・二級の視覚障害者中たどたどしい触読能力を含めて、点字の読み書きが出来る者は、約二十五パーセントといわれています。現実に各点字図書館の貸出しタイトル数を見れば、点字図書より、はるかに多数の朗読録音テープが利用されています。それでは、点字図書は不要かといえは、そんな事はなく、小説やエッセーなどは、テープで聴く方がスピードがあつて好都合ですが、

知識を身につけるには、耳からの情報は不確実で、たとえたとどしくても、点字を一字一字指先で探り乍ら読む事が大切なのだそう  
です。

盲人の方々は鍼灸マッサージを職業として  
いる場合が多いため、近代医学の知識も必要  
で、そう云う方々のため、私は主に筋肉、神  
経疾患、ペインクリニック、整形外科系の医  
学専門書を点訳しております。たまたま私は  
英文科を卒業しておりますので、英語も点訳  
出来る云う事で、高校受験の英語問題集を  
岩手県の盲学校から依頼されて点訳した事も  
あります。また私が麻雀をたしなむ事を知っ  
た点字図書館の麻雀大好き盲人職員の方が、  
「是非麻雀の本を点訳して欲しい」と言い、  
これは実に大難事業でありましたが、入門か  
ら中級クラスまで三冊ほど点訳し大変喜ばれ  
ウエイティングが出る程貸出されていると聞  
いた時は、苦勞した甲斐があったと思いまし  
た。これがきっかけとなり、ある新聞社主催  
の盲人麻雀教室、麻雀大会が開かれるよう  
になりました。思いもかけない事で盲人の方々  
に喜んでいただき、ウン十年前、私に麻雀の  
手ほどきをして下さったクラスメートの小山  
郁子さんに感謝の意を表します。

点訳奉仕を通して、別の世界を知ったよう  
な気がします。盲人の方々に教えられる事多  
く、よきライフワークを神様からいただいた  
と感謝しております。ささやかながら、一隅  
を照らす事が出来たでしょうか。大分年をとっ  
てきてしまいましたが、我が目が一日でも長  
く使えますよう祈り乍ら点訳の日々を送って  
おります。

(女専英1)



ミセス・タッピングと共に

思い出すままに

山本 祐子

創立五十周年お目出度うございます。  
創立当時の状況を思えば現在の学院のめざ  
ましい発展ぶりは時代の背景があるにしても、  
想像も出来ない事でした。

昭和十九年女学生は戦力の一部として軍需  
工場で働いて居ました。二十年三月繰り上げ  
卒業で卒業式はしましたが、五月二十五日横  
浜大空襲で家は焼け山梨の母の実家へ疎開す  
ることになりました。

八月十五日終戦、十一月にはもとの家の場  
所へ家を建てましたので横浜へ帰って参りま  
した。生活物資ごとく欠乏していた時代  
でしたから生きて行くのが精一杯と云う状態  
でした。

二十一年になり生活が少し落ち着いて来ま  
すと女学校で勉強が出来ませんでしたので又  
勉強したいと思いましたが東京まで毎日通う  
のは交通機関も現在の様に便利ではありませ  
んでしたのであきらめて居た処、三春台に女  
子専門学校が出来ました。戦争中充分な勉強  
の出来なかつた若者が戦災の焼跡の中から勉  
強の意欲にもえて三春台に集まりました。食

糧不足の時代ですから、調理実習にはお米やその他の材料を持ちより、薪を燃して煙にむせながらお料理を作りました。三年生の時に、学校に教員免許資格の認可を受けるために全校生が試験を受けました。この事が現在の短大での教職の単位をとることで教員免許取得と云うかたちになったのです。

創立当時の学生達は、大変苦勞をしたという事を現在の学生さん達に知っていただきたいと思いましたので。

あれから半世紀が過ぎました。夢の様でもあり種々の出来事がありすぎて走馬燈の様に頭の中を駆けめぐります。松垣先生はじめ相川先生も亡くなられ、同期のお友達も少しずつ他界、だんだん淋しくなって来てしまいました。昭和三十四年主人の新潟大学への転勤で新潟へ参りました。新潟へ着いて先ずびっくりしたのは電車がなくてどこへ行くにもバスでした。その頃は東京も横浜も電車があり都会には電車が走っているのが普通と思つて居ましたから。今では横浜も電車がなくなり東京も一部だけとなり、新潟の方が現代的だったのかも知れません。

新潟と云えば万代橋。柳。堀。が代表的なものだったそうです。当時はまだ堀があり、

両側に店屋があつたり、木の橋がかかつて居りました。ホテルと名のついた建物はイタリヤ軒位で旅館も古風な建物でとても情緒的な町でした。三十九年東京オリンピックの年に新潟では六月六日に国体が開催されました。その為、堀は埋められ道路となり急速に近代的なホテルが増えました。信濃川に新しく一本、昭和六橋と名付けられた橋がかげられました。町並みは整備され美しい町になりました。昭和天皇、皇后両陛下も帰京され、六月十日国体は無事に閉幕し、ホッと一息した六月十六日午後一時三分、新潟地震が起きたのです。戸棚の食器が飛び散り、箆笥の上のものが落ちて来て、生まれて一ヶ月半の娘を抱いて外へ飛び出すのが精一杯でした。主人はバス停でバスを待つて居た所、目の前の道路

が大きく割れ、電柱が倒れやつの思いで家までもどつて来ました。バスに乗る前だったのが幸いでした。市の中心地でも道路から水が噴き出し陥没し建物傾き、出来たばかりの昭和六橋はつなぎ目から落ち、八千代橋は橋のたもとで陸地との間に大きく段差がつき、一番古い万代橋だけが何の被害もありませんでした。海面より低い町は一ヶ月泥につかたままとなり、私の住んで居た大学の官舎の

あたりは市の中心との交通が出来なくなり、民家の火災はありませんでしたが、昭和石油のタンクが炎上し一ヶ月以上燃えていました。黒煙は空を覆い数日後黒い雨が降つたのです。石油タンクの近くの住宅の人々が緑地帯の官舎の周囲に避難して一週間程野宿をして居ました。一晚中ワイワイガヤガヤと騒がしく安眠できない日が何日も続きました。電気、水道、ガスが止り、しばらくは手持ちの食糧で間に合せ、水はお風呂にためておいた水でしのぎました。娘は母乳だったので飲料水がなくても困りませんでした。粉ミルクの人は大変でしたでしょう。三日程して給水車が来て水が飲める様になり、一週間後には野菜やお魚が配給になり避難して居た人々も家に帰り始め、だんだん平常の生活にもどれる様になりました。すべてが元通りになるのには数年かかった様に思います。つい最近まで傾いたビルが残つて居ましたが三十年過ぎて、震災の傷はもうどこにも残つて居る様には見えません。

新潟に移り住んでから早くも三十七年の歳月が流れ生れた土地よりも長く住んだ事になります。お米、野菜、お魚とおいしい物ばかり、今では新潟は離れられない所になりました。

た。もう一つ動けない理由があります。好きで続けて居た箏曲を、この地で教えはじめ三十年にもなると、弟子の人数も増えて一社中をまとめる立場となり、現在は初代村田松泉（お琴の譜本を始めて編纂発行した先生）より一門の後事を託され家元代行となり、今年松泉先生の三十三回忌の追善演奏会を七月に開催する運びとなりました。昭和三十九年に先生が亡くなられてからも、毎年温習会を開き弟子の養成につとめて来ましたが、近頃はお稽古事に関心を持つ若い人が少なくなり将来を心配して居ります。日本の伝統音楽である箏曲を若い人達が継いで行かなければ何十年か先には跡形もなく消えてしまう事でしょう。絶滅する動物の様にならないため、何とか若い人達を育てたいと努力致して居ります。

新幹線が出来、時間的には早く関東圏に行かれる様になりましたがふるさと横浜は遠い存在になってしまいました。たまに行く事があってもあまりの変わり様で今浦島で迷子になりそうです。年金をいただく年齢になり、一日一日を大切に有意義に生きて行きたいと思っ  
て居ります。  
（女専業主）

## 私の引退生活

リーデイ實子



左が筆者

私達はここ Pilgrim Place に引退して一年九ヶ月になります。引退 (Retirement) とは、Rest, relax, recreation という事等と自己流に考えておりました。それが決してそうではないという事がここへ来て判りました。仕事は全部ボランティア、どんなに働いても収入はありません。唯お互いに他人を思い他人のために役に立つ事をする、それがモットーではないかと思うのです。ここ、Pilgrim Place には三百人位の人がいます。昼食は全

員一緒にファミリースタイルで頂きます。その前の三十分間ピアノ演奏を楽しむ事が出来ます。これは自由参加ですが、私にとっては唯一の楽しみになりました。

### 腕のない人

美しいピアノの音にひかれて私は今日もロビーの椅子にすわる  
今日はショパン、ポロネーズとノクターンを入れかわりにひくという

だんだん聞く人がふえてきた中に一人両腕のない人がいる  
深刻な顔つきで立ったまま聞いている  
椅子をすすめたけれど

そーっとしておいてあげたい  
彼の心の中は?…と思うと胸がしめつけられる思い

生れた時から両腕はなかったと云う

どこから見ても彼は端正でハンサムな人  
私は彼をベストドレッサーと呼ぶ  
事実彼はいつも趣味の良いものをきこなし  
ている

「ピアノをひいてみたい。」

「ピアノにさわってみよう。」

誰もいない所でそう思っているのでは  
それも無理な両腕のない人  
食事をする時の様に足を使って？  
彼だったら出来るかもしれない

私はこの人がふびんで仕方がない  
ひきしまった唇は彼の優しさも表している  
歩き方も姿勢よく美しい

唯腕がない、肩からすっぽりと腕がない  
それでもずーっと生きてきた  
人一倍生きてきたのではないか？

「神様、この人を特別見守って下さい。」と  
祈るわたし

彼はピアノをききに毎日くるわけではない  
余りにもつらくて毎日にはたえられないのか  
も  
ピアノの音は美しい、悲しい時もある  
彼にとってピアノの音は？

### クラシックピアノニスト

今日はクラシックピアノニスト

彼は全音で楽譜はいらぬ  
ベートーヴェンでも、リストでも、ショパ  
ン、シューベルト  
どんな曲でもひきこなす

この人はまさに天才ピアノニスト

彼は弾きながらハミング・メロディを唄う  
ピアノニシモの時はその声が一寸じゃまにな  
る：が

余計な事は云うまい

彼の頭の中には楽譜が何枚入っているのだ  
ろうか

すばらしいピアノニスト

彼の本職は牧師

いつどこでピアノをひく事に精通したのか  
知らない

何しろここではナンバーワンのピアノニスト  
目の見えない人に何故あの様に複雑な曲が  
ひけるのか判らない

(女専英3)

さいごに一句

まげません 年を重ねる わびしさに



## 学院からの贈物

横山 凉子

創立五十周年おめでとうございます。

女専の一回生として入学したのは敗戦直後の、まだ混沌とした状態の中でした。五月の明るい光の中で迎えた入学式は、それまでの暗い抑圧された時代から解放された、希望に満ち溢れたものでした。

相川先生、時田先生、松垣先生等、諸先生から、個の確立、思想の自由など、人間として生きていく上で一番大切なものを教えていただいたと思います。小学校、女学校と、公立で過ごした私にとって、関東に入学して一番印象深く、また喜びであったのは、二時間目と三時間目の間にある、あの四つの塔の下のチャペルでの礼拝の時間でした。初めて手にした聖書と讃美歌は、ずっしりと重く、ちょっと大人になったようで、心はずむものでした。歌えるようになった讃美歌の番号に丸をつけるのも楽しいことでした。

家庭の事情で欠席勝ちであった私は、在学中一回もクリスマス礼拝に出席出来なかったのが、今でも残念でなりません。また、二年の夏休みか三年の夏休みに内村鑑三の「余はいかにしてキリスト教徒となりしか」を読み、

感激してリポートを提出し、時田先生に褒めて頂いたのも懐かしい思い出です。

このようにして、三年もの間、礼拝の時間をもち、讃美歌を歌い、聖書のお話を伺っておりましたのに、石地に蒔かれた種のように、信仰の方はさっぱり成長しないでおりました。でも、神様の方は決してお忘れになることはありませんでした。

「あなたがどこに行っても、あなたを守り、この地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを忘れず、あなたを見放すことはない。」と、創世記のヤコブに約束なさったように。

卒業して四十数年、決して平坦な道ではありませんでした。不安な日々、憂いに心ふさがれたり、理解できないような人間関係に悩んだりしたこと、その他病気に苦しんだこと等々、もちろん喜びの日々もありましたが、その折々になかったお言葉が与えられ、本当に感謝なことでした。名ばかりのクリスチャンではあります。主人共々洗礼を受け、ささやかなクリスチャンホームで、日曜日の礼拝や聖書の会を、月に三、四回しております。それが今では、なにより心の支えになっていると思えます。

若い時幸せと思っていたことと、キリスト

を信じてから与えられた幸せとの違い、そういうものを近頃しみじみと考えさせられます。

そんな事を考えると、若かった日々、関東で聖書を読まされたり、讃美歌を歌ったりしたことが、どんなに役に立っていることかと感謝しております。

今も時々、車で関東の下を通ることがあつて、あの四つの塔のある茶色の煉瓦の建物を懐かしく見上げて通ります。あれからもう五十年、わたしたちはもう髪に白いものがまじるようになりましたが、母校関東学院は、その長い時代の風雪に耐えて、今も健在である事を嬉しく思います。

「神のなさることはその時にかなって美しい。」 旧約聖書 伝道の書

関東で初めて聖書を手にし、あちこちと拾い読みしているうち、ふと目に入った言葉です。学生の頃は何となくいい言葉だなあと思っていただけでしたが、年を取るにしたがって、その言葉の広がりや、奥行きに心を打たれます。敗戦後の混乱期、世の中の価値観が激しく揺れ動く時に、時代を超えて変わることはない聖書の言葉を教えられたことは、なんと有り難いことかと、つくづく思う今日この頃です。

(女専家1)





タイプで授業



女専2回生京都嵐山太田別荘内



Mrs. Brownと



X' masの芝居?



調理実習



S28 池の平スキー



被服実習

# アメリカ在住の旧友を訪ねて

飯吉 玲子  
平尾 富子

今回、飯吉玲子、平尾富子の二人は、一九五〇年（昭和二十五年）女専英文科二回卒業以来、四五五年の空間が、どんな対面になるかと心配を抱きながら、米国在住のクラスメートを訪れる旅をして参りました。平成八年三月二二日、冷たい雨の降る日本を飛び立った私達は、第一宿泊地のロスアンジェルズに同日、午前一〇時五〇分着、暖かい朝でした。翌二三日、第一目的地ボストンに向け飛び立ちました。空港でアンダソン貞子夫妻の出迎えを受け、古い歴史の街に一步を印しました。ご主人は以前、関東学院大学で教鞭をとっておられた方です。道路のあちこちに積み上げられた雪が昨日迄の寒さを物語るかのような冷たさでしたが、空はあくまで青く快晴のボストン滞在でした。日本への交易船出入港、黒船、美術館等にご夫妻厚意の見物、見学の日々を楽しませて戴きました。二六日ご夫妻の見送りでカンサスティーに向かいました。途中セントルイスに寄港、そのまま、ミズリーミシシッピー川を下に見ながら川沿いのとてつもない広い街の大きな空港で、八千代スミ

スさんの出迎えを受けました。彼女宅を拠点に三一日迄、スベリ美津江さん、ワグナー美与さんを加えた三人のクラスメートと私達で、毎日連絡をとりあい、りすや野兎の横を車が走るのかな街で交友を温めました。八千代さんのお力添えで、グラハム（旧姓堀）洋子さん（オハイオ）、旧姓笠原星子さん（ワシントン州）のお二人とも電話で話すことができました。お元氣だったのが何よりでした。三〇日には、八千代さん（日米協会会長）と共に美与さんの日本語学級を參觀に参りました。沢山の漢字を正確に書いている子供達に驚きました。美与さんは永年に亘る善意のボランティア活動を讃えられ、四月中旬に受賞され、盛大な表彰式があるとのことでした。八千代さんはご主人亡き後、ご子息（歯科医）と共に歯に関する会社を手広く経営、ご主人から教えを受けた歯科医が日本に大勢おられるとお聞きました。美津江さんはご主人が、シンガミーシンの販売を手広くされ、子供三人の独立後、恵まれた環境の中で趣味の絵と手芸、又近所のご老人のボラン

ティア活動をされています。美与さんはご主人の体調に気を配りながらのボランティア活動、ご子息は日本向けのコンピューター関係の仕事をされておられるとか。三一日朝、昨夜遅く迄、私達の為のパーティーで別れを惜しんでくれた彼女達、五〇年近い時間が一瞬消されてしまったような一週間、再会を約しながらの別れでした。ご家族の皆様方との楽しい日々感謝しつつ、同日午後、ミルウォーキー着、石井英子さん迎えの車で、新築された家に落ち着きました。こちらで、和食を美味しく作っておられるのに驚きました。例えば、キンピラ、ヒジキから茶碗蒸し等など、食卓に並べられ、私達が育った遠い昔の学生時代を懐かしく思い出させてくれました。ご主人は大学で教鞭をとっておられ、彼女も日本の企業の方々の通訳など時折され、その時もインディアナポリスから戻られたばかりでした。一男三女のお子さん達は、医師、歯科医、弁護士と、独立されており時折帰られるお孫さんの良きおばあちゃまでした。隣町のシカゴへは車で二時間位、ミシガン湖畔をひた走り、美術館、博物館を廻り、シアーズタワー〇三階を一分で登り、その速度を感じさせないのには只ただ驚きでした。余りの速さに三人

で時計を見つめあった程でした。米国に来て先ず驚いたのは昭和四五年（一九七〇年）最初に訪米した折りの一ドルの価値が殆ど変わっていないなかったことで、当時三六〇円現在一〇〇円の違いが少しも感じられない、住宅、食料、衣料等、日常使用する物価の安さ、日本では想像もつかない生活のし易さ、国税、州税で賄われているらしく殆どのハイウェイは無料。税金を払うことで自分達の生活も豊かになる実感。まだまだ日本は追いつかない良い所の多い大きな国で生活をエンジョイしているクラスメート達でした。訪米中、私達に対するご厚意とご協力をいただいた皆様、ありがとうございました。女専開校五〇年にあたり米国在住の皆様からのメッセージをお届けし、元気で頑張っておられるご様子をお伝えします。（女専英２）



スベリー 美津江  
スミス 八千代  
平尾 飯吉

## ミルウオーキーにて在米三十八年

石井 英子



飯吉（小林）

玲子及び平尾富子氏の思いがけない御二人の御

卒業の機会に同期卒業の方々が

数多く渡米していることを知り、何時もアメリカにも関東学院同窓支部をつくってみたいと思っている私達の心の中に大きい希望を残して下さいました。各それぞれ色々の分野で関東学院時代に得た学びを生かしてアメリカと日本のために一生懸命働いている人がほとんどこのことを知り、喜ばしいことと思っております。主人も私もアメリカで学んだ経験を生かして日本で働くつもりでしたが、主人の研究論文の結果、アメリカの大学に研究室を設置する機会に恵まれ、アメリカの若い人々を指導することになりました。

考えますと、私共はついつい忘れ勝ちになりますが、終戦後、どれだけアメリカの国に助けられたか、色々考えますと私共は日本に帰らず両親には気の毒でしたが、これで良かったのだと、少しでもお役に立てたら...と思っております。

たのだと、少しでもお役に立てたら...と思っております。

一生懸命アメリカ人のみなさまが世界各国より集って来る外国人留学生を指導している「縁の下の力持ち」、又、四人の子供を育てつつ、関東学院の数々の先生を通して学んだものを心の支えにして過ごしております。

関東学院五十周年を心からお祝い申し上げますと同時に、必ずアメリカに関東学院同窓支部を作りたいと思っております。（女専英２）

## 女専を想う

スミス 八千代

数日前、飯吉玲子さんからお電話をいただき、平尾富子さんとカンサス市（ミソリー州）に在任の美与ワグナー（旧姓柴田）、美津江スベリー（旧姓川崎）、私、八千代スミス（旧姓佐藤）の三人を訪問されたいとの事でお二人は三月二六日に到着されました。関東学院女専を卒業して四十五年経ってしまっただけで夢の様です。戦後の豊かでなかった時代に将来に希望を託し元気に学業に励んだのではなかったかと思えます。当時、今考えると

非常に優秀な先生方を関東は擁していたと思います。英語の光畑先生の発音、大下先生の文法が現在の私の英語の基礎になったと信じます。相川先生が本の乱読を勧めてくださった事も忘れられません。英語を学んだ結果、アメリカ人の夫を持ち在米する事態になりました。教育に熱心であった私の父母には傍にいてあげられなくて申し訳なかったと今でも残念に思います。でも私は後悔のない一生を送れた、意義のある人生であったと心から思います。関東学院女専で学ばなければ私は全く異なった人生を送ったことでしょう。私達のクラスには肝っ玉の太い娘が大勢いました。今では肝っ玉おばさんになりましたが気持ちには当時と変わっていません。良い教育を授けて下さって感謝して居ます。(女専英2)

## 在米四十二年

スベリー川崎美津江

関東学院の五十年の歴史を米国から、御祝い申し上げます。学院のモットーだった“人になれ奉仕せよ”を未だに心に入れて毎日がんばって居ります。(女専英2)

## カンザス便り 在米四十三年

ワグナー美與

関東学院女子専門学校創立五十年を祝い、第二期英文科卒業同窓生飯吉玲子様、平尾富子様お二人が遠路遙々、私共カンザスシティ在住三名を訪問下さいました事は目に余る光榮と友の御厚情を深く感謝しております。

終戦により、望みも夢も生きる目的すらも失ってしまった若者の一人として、外国人の書いた日本に関する本を読んで見たいという漠然とした気持ちにかられ、英語の勉強を始めたのが私の新しい第一歩でした。

関東学院の夜学英語教室で教科書に使った聖

書から、全く新しいキリスト教に基づき考え方を教えられ、後日受洗しました。

当時従軍牧師に基づき考え方を教えられ後日受洗しました。当



ワグナー美與

スベリー美津江

時従軍牧師であられたチャブレン、ジョージ・ヒクソンの御推薦を頂き、当市にあるセントラル・バプテスト神学校に留学する機会を得ました。

40ドル丈持って無一物に近い状態で外国に来た私は、アメリカに住む人々の心の大きさ、愛の深さに支えられ、無事に神学校を卒業しました。

それと同時に、母国を離れてこそ、心も姿も美しい日本を再認識した私は、アメリカの人々に真の日本を知ってもらいたいのが念願で一九七三年から日本語を教えております。教職を続け得る日は幾許も残っておりませんが、二千人以上の教え子を通じて、私の育てて来た大切な夢を果してもらえ事を信じております。(女専英2)



## ポストン便り

アンダーソン貞子



関東学院女子  
専門学校に在学  
した事が、私の  
一生に強烈な感  
動を与えてくれ  
ました。

終戦後、家は焼かれ、富も失い、あったものはお互いに支えあってゆく友情だけでした。空腹でも毎日友達と笑い転げた思い出ばかりです。

学校ではキリスト教に初めて接し、戦後の不信・混乱・失望のどん底に居た学生にとって、希望、博愛また精神力の強さを教えられました。神の愛、友人の愛は私の心の支えです。この度平尾さん、飯吉（旧姓小林）さんが十数年ぶりにポストン在住の私を訪ねて下さり、久々に旧交を温めました。お二人とも有難う。そして関東学院万歳!!

（注）アンダーソン・貞子（旧姓原）さんは、関東を経て、立教大学で学ばれ、その後州立オハイオ大学で修士号を受領されました。ご主人のジョー・アンダーソンさんは米国最大の公共テレビシステム（PBS）ポストンWBH局の副社長であられるし、日本映画に關する数冊の著作をされました。（女専英2）



日本語学校にて



生徒さんたちと



スペリー美津江宅



スミス八千代宅

# 覚え書 (二十三)

—女專・短大小史—

上市 二郎

早いもので平成八年(一九九六)は女子専門学校発足から五十年という大変大きな節目の年を迎えました。この期に際し、香葉、第二十五号記念号を計画されている由大変嬉しいことです。心からお祝いを申し上げます。編集委員及び関係各位にご努力の賜ものと感謝いたしております。

昨年は一月中旬大地震が発生し、その後色々なことが起って好ましくない年でした。その様な時、短期大学発足と同時に就任され学院の定年迄奉仕された兵藤正之助先生が突然九月に昇天されてしまいました。先生は私と同年齢の為親しくご交誼願っており、短大の校風を一段と明るくして下さったことなど思い出されますが、訃報に接した折はぐんと血の気が引く思いがいたしました。心から冥福をお祈り申し上げます。それから、暮の押し詰まる十二月二十六日(火)午後二時、学院の女子教育の産みの親ともいべき相川高秋先生が神のみもとに召されてしまったということです。神様のご慈愛をもってあと半年の時間が与えられるならば、記念の諸行事にお顔を拝し共に語り合えましたものを、と思う時本当に残念でなりません。どうぞ安らかにお眠り下さいと祈るのみです。

新しい年を迎え前述の如く平成八年は末広がりの年、五十年目の記念日に向けて希望に胸を膨らませる人々、これまで過ごしたこの年月に色々な思い出を語り合える人々、また、これを機に集りを計

画する人々などあると思いますが、最も良い年として過ごされることを望んでいます。

昭和四十二年四月本学にご就任され昨年三月末日学院を定年退職されました林淳三先生は、皆様ご承知の通り春の叙勲に際し多年にわたる教育功勞により勲三等瑞宝章を授賞の榮譽に浴されました。心からお慶びを申し上げます。前号で記載した如く先生は現在学校法人彰栄学園長の重責におられますので、呉々も健康にご留意なされ益々のご活躍を心からお祈り申し上げます。

今年は国文科が設置されて丁度三十周年に当たりますので、この秋には記念行事の計画がある由に伺っています。本年は最良の年でありますように願っています。

さて、前号では昭和三十五年の英文科第二部のリトリートを今度卒業する二年次生の歓送会を兼ねて旧高商部の卒業生が経営する湯河原の亀屋旅館を会場に実施した。という所迄で終わっています。同じ頃に昼間部のリトリートについても話し合いがされていて、本年は学生数も増加したので天城山荘で行うリトリートを学年別に実施したらどうか、など討議されました。そして四月に入ってからは具体的にリトリートについて再度話し合いをもって英文科と家政科とに分けて行うことになりました。英文科は五月五日(木)から七日(土)にかけて天城山荘で行い(但し五日は子供の日の為に五日九日を臨時休業とする)家政科は英文科第二部の使用した様子などを参考にして湯河原の亀屋旅館で五月十八日(水)から二十日(金)にかけて行うことになりました。

今回の主題は「流れの中に立ちて」で、両科共に相川高秋先生が講演を担当しました。(短大三十年記念誌より)後日、英文科の天

城山荘に於ける指導の先生方の氏名が発表され役割などについても公表されています。この時は坂田学院院長も参加され、礼拝は大島宗教主事、講演は相川先生と兵藤先生でした。然し後日兵藤先生は都合が悪くなり、講演は大島牧師が代って行うことになりました。この時代の宣教師はマクダニエル先生でしたが、この先生も参加する筈の処急に中止となり、その他は安藤先生、小玉先生、大河原先生と大学体育担当の湊井東先生が参加して指導して下さると発表されました。次に家政科の会場、亀屋旅館は奥湯河原に向かって右手の傾斜地を上手に利用して建てている旅館で仲々工夫をこらした建物



だったことを思い出します。

リトリートといえは必ず食事の後にテーブルスピーチがあつて和やかなひとときを過ごしたものでした。会員諸氏も色々な思い出があることと思います。ここで思い出するのが鳥越ノリ先生のスピーチで、男の先生方の奥さまに対する呼び方が年齢に依り変化していくことを材料に話されたのが印象的でした。例えば年齢の若い順に「うちのが」「ワイフが」「女房が」「家内が」「婆さんが」と云うように変る。また「大」のつく名前の学生が三人在籍しておりスリ―ダイスだと云つてとても仲の良い三人組、この学生達が寸劇を披露しましたが、その演出は現在の大河原幸男君だったことを思い出しまし

た。何はともあれ内容のない漠然とした記録になりましたが、会員にしてみれば三十五年前の学生時代が思い出されて懐かしいことでしょう。

次に北海道旅行は今年度は中止する旨の学校方針が打ち出されました。この旅行は隔年に実施する予定で、本年はその計画もなかつたが、昨年の秋、急に九州旅行を実施したこともあったので改めて茲に念のため発表したものと思います。また、この年の校舎建設募金計画にも影響するのでは？との声もあり、その可能性をも考慮した上で本年度は中止する。と発表されたのだろうと想像します。

いよいよ卒業式が近くなりました。目下懸案となつていた黒のガウンの使用が準備も出来ましたので、この年の卒業式から着用することになりました。これで会場内の和洋不揃いだった服装も黒一色に落ち着くことが出来て今ではすっかり板についています。そうして例年のように役割分担が発表されていきました。司式は、兵藤正之助先生、卒業証書の係りは安藤寿々代先生と松本久子書記、卒業生の氏名呼び上げは松垣好子先生と小玉敏子先生、会場係りは、安藤先生、松垣先生と筆者、接待係は井口安喜子先生と鳥越ノリ先生、受付案内は松垣先生と大河原泰之先生、答辞の指導は安藤先生というように小人数の先生方が掛け持ちで対処せざるを得ない時代でした。同じ頃英文科第二部の役割も次のように記録されていきました。司式は兵藤先生、卒業証書係りは安藤先生と松本書記、卒業生の氏名呼び上げは大河原先生、聖書祈禱は下田牧師となつていました。そして昼間部の卒業晩餐会は三月十八日(金)午後五時からシルクホテルで開催すると発表されていきました。

直接同窓会々員の方々には関係ない事柄かも知れませんが記録し

て置く必要上次のように記載しておきます。当時は病氣などで休職すると私立学校教職員共済組合の規定に従って給与の八割が見舞金の型で一定期間支給されるので学校の給与は停止になります。従って休職すれば減給になって仕舞い、その為にそのような場合を考慮して月々の給与から規定の割合で減金し、その額の倍額を事業主が據出して基金を作る。若し休職するような事態が生じたならば規定に従って不足の二割を会から支給することとなります。このような互助的な考え方で発足し、資金が大きくなった場合は、それ以外の活動を委員会で検討し会員の厚生関係に役立てて行く制度であります。学院本部と大学・短大の組合連合と話し合いを進めていきました。五月一日から発足することとなりました。そして最初の委員長は富田富士男先生でした。委員の構成は各校の教職員からと法人の指名された委員等で運営する。短大の代表委員は兵藤先生で、法人の指定する委員として筆者が選ばれました。

ところで前述の如く学生数が多くなりましたので、教育上A Bの二クラス編成とすることにいたしました。一年Aクラス主任は大河原榮之助教授が当り、Bクラス主任には小玉敏子講師が当ることになりました。そしてこの年の非常勤講師の講師会は四月六日(火)精養軒で開き講師の先生方を招待して晚餐を共にしながら新年度の打合せに時を過ごしました。

四月からの夜間の事務所については短大として独立し現在の事務所(当時は木造の建物の一号館一階南西角)に置くことに決定しました。第二部主任としての事務は兵藤正之助教授、大河原榮之助教授と筆者が加わり交替で行うことになり事務員は学生アルバイトを

置く予定ですが、決定する迄奥山(現大河原)幸男氏に依頼しようというところで始められました。

前にも述べてきましたが校舎建築計画が具体的にになってきましたので、家政科の特別教室が新校舎建設用地に有るため、被服構成実習室、被服準備室、和裁教室が一号館(木造校舎で海に面した建物)の二階に移動して授業を行っていました。そしてこの古い海軍の大浴場だった建物を取り壊し、地盤の地質検査(ボーリング)をして基礎工事を進めるのに大変時間がかかりました。然したとえ時間が少々延びても、いよいよ具体的に予定が進むのをみれば大変嬉しいことで希望に燃えての毎日でした。

六月に入ると、もう夏の予定が発表になっていますがこの年は建築に伴う色々の事務処理が予定され、いつもの行事が仲々決まらず夏休み前の各クラス對抗校内合唱コンクールも中止となりました。例年の夏期講習会も英文科は次の予定で実施されましたが、家政科は前述の如く実習室の移転に伴ってか? 本年は行わないと決定しました。英文科では会話・作文コースが相川教授と小玉講師、英文講読コースは小山田講師と高田講師と野口講師となりました。

教員研修会もこの年は第六回目を迎え、大学・短大の先生方が七月六日(水)から八日(金)にかけて葉山小学校寮(現在の大学葉山セミナーハウスの場所にあった建物)で開催、葉山は近いので先生方に都合をつけて宿泊するようにお願いし、日帰りする方には注意がありました。この時は宣教師のコールダー先生が在任中で教授会にもリトリートにも積極的に参加していました。

この頃教職員は機会ある毎に知り得た情報を交換しあって短大校舎の実現をより良いものにしよう、と知恵を出し合って出来るだけ



良い物の完成を望んでいました。会合のあるたびに相川先生から建築計画の進行等について報告が行われ、先生方との話し合いがなされていきました。夏の休暇に入る頃ともなると、目安として新校舎建設は十月から翌年二月末迄の五ヶ月間の予定で実施されるため、その資金計画もその予定で考えるよう計画するとの報告もありました。

九月も半ばを迎える頃の記録に次のように書かれている記事が目に入りました。それは白山源三郎大学長がローマでオリンピック大会に付属して行われるレクリエーション協会世界会議に出席のため、九月十七日(金)羽田を出発されました。留守中は相川短大学長が代理事務を行う、となっていました。(この記事については後日短大校舎建設に関わる点で大変有利に運んだのを思い出しましたので敢えて茲に記載しました)

宗教強調月間については、本年は学生数が多くなりましたので学年毎に計画しよう、と学長から十月上旬提案されて十一月十五日(火)と二十二日(火)の三、四時限に講演会を開くことにしました。講師は十五日が北森先生に、二十二日は高木先生に依頼することとし、交渉の結果承諾が得られ実施しました。なお、教授団の研究会は(当時)現在行われている「日本文化とキリスト教」研究会を強化して宗教強調週間のため十一月十六日(水)と二十五日(金)に行うことにした、と記されていきました。

十月頃の記録には次のような記述がありました。以前三春台当時即ち女専から短大に入る頃、本学の宣教師でありましたミセス・タッピングが来日されてご主人の追悼会を十月十六日(日)に霞ヶ丘教会で行うこととする、ということでご古い卒業生も参加されたことと申します。

この年のシェイクスピア英語劇は鼎立音楽堂で十一月二十一日(月)上演されました。演し物は「むださわざ」でした。昼間部は午後の授業を打ち切りとし、夜間部は休業とします、と公示されていました。指導としては授業打ち切りにするので出来るだけ観劇するよう勧められた。

前述でご承知の如く海軍の施設だった大浴場を取り壊してその跡地に建物を建てるので、仲々直ぐには形にならない、十一月始め新校舎建設予定地のボーリングが行われ、その結果地盤は比較的良かったと学院本部から報告がありました。なお、本館落成後三年後に短大別館が完成するのですが、その折のボーリングと比較して、どうも昔は短大の本館半分ぐらいの所まで海だったようですと工事関係者の話に乗って工事の折、基礎部分の下を覗き込んで見ると古い護岸工事の跡が残っているのが見えました。従って大学校内の方に進むにつれて地盤が弱く工事費が高つくことが判りました。

次に例年行われているスキートの体育実習も、この冬の行事として昭和三十六年一月五日(木)から十日(火)まで山形県蔵王温泉スキー場(吉田屋旅館泊)実習が行われていました。この時は大学・短大の希望者八十名、費用は交通費宿泊費込みで三千二百円でした。大体育担当教員湊先生及び岡村先生の指導で実施され本学からは確か相川先生と安藤先生が参加したように記憶します。この折は第二次(二月二十七日)三月五日)第三次(三月六日)八日)が計画され、これにも短大生の希望者があるので安藤教授に付添いをお願いすることにしました。

学院の創立記念日は一月二十七日(金)で、昭和三十六年は創立四十二周年に当り、記念式は三春台校地で実施されました。教職員の

記念祈禱会から始まり記念式、式終了後の懇親会は年一度の学院教職員顔合せの場でもありました。例年の如く創立記念講演会も開かれ成功裡に終了したと記録されておりました。

昨年と同様今年も卒業する英文科第二部二年次の歓送会を兼ねてのリトリートは三月四日(土)五日(日)湯河原の敷島館(私学共済組合寮)で行うことになっていましたが、後日都合で変更し清光園を利用し実施することになりました。

二月の半ばともなると本年度の卒業式の委員(役割分担)が発表されていきました。司式は兵藤教授、卒業証書は安藤教授、卒業生氏名呼び上げは筆者、会場係は安藤教授と松垣助教授、接待係は井口講師と鳥越講師、受付案内は松垣助教授と大河原助教授、答辞指導は安藤教授となっていました。相変らずの小人数での割り振りでした。

同じ時に英文科第二部の役割が次のように発表されていきました。司式は兵藤教授、卒業証書については柴教授と松本久子書記、卒業生氏名呼び上げは大河原助教授となっており、聖書祈禱は下田牧師となっておりました。この時の卒業生の人数は英文科八十九名、家政科四十三名、英文科第二部は十六名と修了者一名となっておりました。

(つづく)

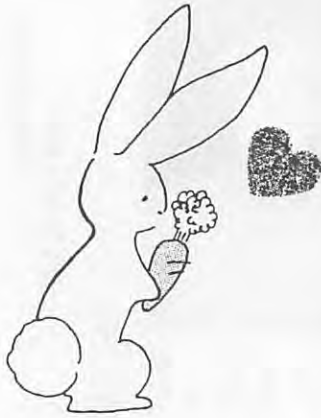


1956年卒業式スナップ

## 創立の頃

五十周年にあたり、創立の頃、学校にいらした教職員の皆様思い出を記していただきました。本当ならば、相川先生・兵藤先生・大下先生・光畑先生等々、思い出深くこの祝典・記念号に登場していただきたいのですが、残念ながら天に召されてしまいました。今回は、門根先生・上市先生・安藤先生と記していただきます。

当時の写真と、現在の写真も同時に掲載いたしますので、移り変りを…!



## 思い出

門根 静子

女専から五十年、益々の御発展をお喜び申し上げます。三春台の頃の話は、上市先生の覚え書で細かに記されていますので、うっかり者の私は読む度に「ああこんなこともあんなことも…」と古い記憶が鮮烈に思い出されます。あの頃の教職員の方々とのご交情にお一人一人の温かいお心を戴き感謝申し上げますが、もう十指では足りぬ程に亡くなられ、昨年残暑の頃の兵藤先生、クリスマス頃の相川先生の計報は寂しさが一層増しましたが、天国では先生方、福本、木村（中高所属）の小母さん達と賑やかになられたらろうと在りし日の皆様のにこやかなお顔を思い出して懐かしんでおります。

旅の思い出の一話、その昔、関西四国旅行の折、琴平金刀比羅宮前虎屋泊りの夜、各部屋の襦を取りはずすと大広間になる続きの間、消燈時間を過ぎても学生達は一日の疲れも何のその、一同大騒ぎ、「シート」、一瞬静まるが亦、「ウワーツ、キャツ、ウホホ」の繰返し、しずめ役の私——何か異様な感じにハッ!!とした、T先生が立っていらっしやるので

す、「余りうるさいので見に来たら…ここで眠れるなんてあなたは豪傑ですなあ、アハア」と、私は今でもこの言葉を「誉めことば」と感謝しています。それからあらぬ今年四月中旬、高知での楽しい同期会の帰路に北海道の友人と金刀比羅宮参拝を思い立ち、本宮までの七八六段の石段を上りお詣りが出来、春霞の瀬戸内海を心ゆくまで眺めました。元気な頃の何倍かの時間がかかりましたが、誉めことばの思い出に助けられました。

二話、希望者夏山志賀高原の折、白樺林をぬける時、M先生「処女の如き肌」と感嘆の言葉を発し、若木の木肌をいつくしみましたと、ご一緒の兵藤先生「エーツ!!」とあの大きな目を更に大きく見開いて立ちつくしました。前をゆく学生達の後姿に木もれ日が輝いていました。

皆様お元気で。  
(体育担当)



門根先生

松本久子さん

## あの頃と私

—女専・短大の初期—

上市 二郎



昭和二十二年三月末三春台を訪れ校庭から眺め

る下街の惨澹たる光景、眼下左の地域は小型機が離着陸、旧高商の丘からは寺院の屋根三ツ目に入り遠い富士山が直ぐ近くに見える焼野原、住宅難、食糧難時代、石段中腹の焼け残った温室を五月から住いに借り女専で手伝いを始める。軍隊生活が終り、戻った社会は女性の域（捜真女学校同居中）戸惑うばかり、三階の小講堂で朝拝後在校生に紹介される、脚はガクガク顔は発熱状態で真っ赤、秋の学校祭演劇で先輩の神谷量平氏作「風の窓」が上演、復員軍人役で出番を待つ動悸の高鳴り。

戦争中休みだった英語学校が女専と同時に再開、毎晩生徒が溢れ特に時田先生の会話は小講堂満席、他のクラスも盛況、謄写印刷のテ

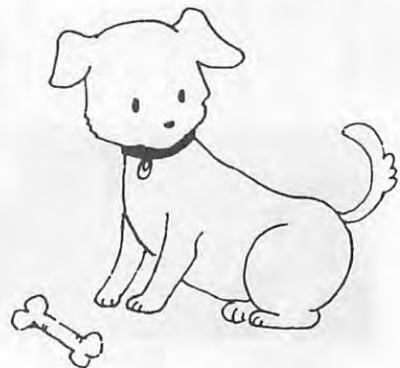
キストも総て有料配布でこれが女専の弗箱だった。蜀黍や芋の粉の加工品、各種野菜や豆入りの代用食、腹一杯で事務室へ、昼に温室迄戻るのに力が無く石段が登れないこと度々。

その冬、目が覚めて驚く、枕元に雪が一列に積もっている。昨夜吹き込んだ模様、学生も外套着用で授業、その翌年女子高等学校併設、この頃タツピング先生の厚意で米軍の空箱を運動場迄運んで貰う、これを学生が暖炉で使う、やっと暖気が漂う、宣教師の援助でララ物資、ケア物資の配給、弁天通りの事務所デスマング氏からも衣料配給を受け一部学生にも与えられた、当時は学生も少数で家庭的な雰囲気毎日楽しく授業した。この頃ジュニアカレッジの問題が検討課題となり各校で研究、昭和二十五年から短期大学が始まる。戦災に遇い六浦で授業していた中学高等学校は三春台へ戻って来ることになり短大は旧高商の鉄筋校舎と別に専用の木造校舎（含茶華道作法室）を急設した。鉄筋の地下に図書室や調理実習特別室を設備し、六浦へ移る迄は昼夜の授業を行っていた。

（元事務長）



三春台内庭にて



## はいい！安藤先生



先生宅にて

言葉で先輩の話が…。

(安藤寿々代先生について)

「先生って昔も今も永遠の美女よね。全然かわらないのよね。」

「昔は帯付の着物で授業をしていたわよ。」

「先生は小柄なのに壇の上で大きく手が上がるとても大きく見えたし、指揮棒を使わないで指揮をしていた。戦後は多くなつたけれど先生から始まったのではないのでしょうか？」

『私が驚いたことが一つあったのは、ある時、礼拝堂に上がっていた時、"かっぱの申し子"のようにピンクや黄色の毛糸の帽子を被って、礼拝に出ていたのが五人位いたかしら。当時は、おしゃれをすると云うことが難しかったので唯一のおしゃれだったのね。』

『よく外国の方がいらっしやった時などは、皆でよく集って歓迎の歌を美しいハーモニーで歌って大変喜ばれたし、クリスマスキャロルは全部英語で覚え、かまぼこ兵舎で歌ったことも覚えてるかしら。帰りにご馳走してくださいってとてもおいしかったわ。笑。』

「困ったことが一つあったのは、授業がドイツ音階で行われたこと。捜真から行った人には何んでもないことがとっても大変だった。

のを覚えてる。」

「決してハニホヘトには変えなかったし、ドイツの歌も良く歌ったわね。」等々。

体育の授業を抜け出し、映画を観に行く時、三春台の階段を降りてゆく時、先生とすれ違っても平気で行ってしまったこと。

家政科の桧垣先生の几帳面なところ。英文科生徒でも相談事があると先生の所へ追いかけて行ったこと。

大下先生の英語で成績が上がったこと。等々：楽しい時間のしめ線りは、やはり讚美歌でした。

久しぶりの歌とはいえ、ソブラノ・アルトに分かれ、美しいハーモニー聞かせていたよきました。



50周年記念式典の日に（ルツ館和室にて）

五月の母の日にあたる十二日、安藤寿々代先生宅へ女専一回生の面々が先生を囲み、楽しいひとときを過ごされました。その時のひとこまと思いを！

『五十周年を記念して私に思い出を書いてほしいと依頼があったので、私が書くよりもあなたがたにその当時の先生方の話をしてもらった方が良くわかるわよね。』との先生の

## 故人を偲んで

### ◆兵藤正之助先生

一九九五年九月三十日召天（75才）、  
一九九六年三月十六日、磯子プリンスホ  
テルにて「偲ぶ会」が開かれました。

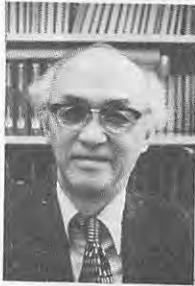
### ◆相川高秋先生

一九九五年十二月二十六日召天（90才）、  
一九九六年二月十日に「短大葬」がもた  
れました。

### ◆小滝奎子先生

一九九六年六月十日召天（72才）、六月  
十三日、横浜指路教会で告別式がとり行  
なわれました。

先生方と親交のあった方々にお別れの言葉  
を戴きました。



### 兵藤先生をお偲びして

光島 洋子

三月十三日、横浜プリンスホテルで行われ  
ました兵藤先生を偲ぶ会に、遠く信州より馳  
せ参りましたので、今回の原稿依頼の白羽の  
矢が当たってしまいました。当日は奥様を囲み  
白髪の先生のご遺影を前に、会場一杯の方が  
集り、夫々のお立場で先生をお偲びするお話  
が続きました。かつてのご同僚の先生、著名  
な学者、宗教家、文学者、先生が指導されま  
した読書会の方々等、先生の多彩なご交際に  
目を見張る思いが致しました。あのやせたご  
病弱とも思えるお体で高齢に達するまで研  
鑽を積まれ、多くの著書を遺され、又ご生涯  
の途上に接せられた方々にそのお人柄、何げ  
ないひと言に忘れられない思い出を残されて  
いるのを知りました。そして終りに香葉会長  
の古城さんが短大一期生として、戦後三春台  
の焼け残りの校舎で、就学年齢を越え進駐軍  
勤務から戻ってきた様な女性を交えた華やい  
だ教室の教壇に初めて教師として立たれた若  
い兵藤先生の緊張したお姿、そして混沌とし  
た世相の中で生きる希望を求めて集った生徒  
達との師弟を越えた心の交流についてのお話  
がありました。私達は短大三期生として、そ

の様な独特の雰囲気の中で学び、今日に至る  
まであの短い二年間が鮮明に心に残る世代で  
す。そして戦後まだ望み得なかった卒業旅行  
の北海道行を企画し、兵藤・門根両先生を先  
頭に、宿屋に渡すお米と鈍行列車泊の重なる  
苛酷な旅に備えて汽車の両座席に渡して仮眠  
する為の観音開きの板と毛布を持参して出発  
しました。旅館泊の第一泊目に隣クラスとい  
たずら娘達に泥睡中の私共は口紅で顔にいた  
ずら描きをされ、報復を練った私共は旅の最  
後の十和田湖畔の宿で、疲労困憊で熟睡中の  
彼女達にいたずらをしにご丁寧にも姿を見ら  
れぬ用心に各自シートを被って出かけた所、  
寝ぼけ眼で恐怖心にあおられた彼女達の騒ぎ  
で宿全体に被害が及び、翌日の朝食の席がき  
まずくなりました。その時、兵藤先生が「昨  
夜、湖の精霊が現れてねえー」と素敵なとり  
なしをして下さいました。仲直り後夕陽の沈  
む八甲田の山並を眺めつつ降りるバスの中で、  
先生の大好きな「お下げ髪の少女」等を精一  
杯歌い乍ら帰途につきました。そのご生涯を  
通して真摯な学者で居られた先生は、又つや  
やかなお人柄をもって私達の心に多くのもの  
を遺してゆかれました。

ご冥福をお祈り申し上げます。（短英3）



短大葬にて

## 相川先生への想い

岸 貞子

九十年の歳月に終止符を打たれて召された相川先生に思いをはせる時、あの日卒寿の祝日、ケーキのローソクの灯を吹き消されたあの時のことが、そして感慨深気な笑顔が、脳裏をかすめるのです。

少しお淋しげな最近でした。亡き奥様に思いを寄せ詩歌に託されての日常でした。でも毅然とした姿勢は常にくずされず読書をとおりた口調で語られていました。時をしっかりとらえられて、御自分の説を伝えられるのです。

戦後の混乱の中で、女子教育の重要性を強調されたこの学院に女子専門学校を設立され将来の展望から女子短期大学への移行、そして多くの女子学生との関わりを持たれました。それも軌道に乗りかけた頃、学院紛争の渦中の人となり深く心を残されたままお引きになられました。その無念さは全身からにじみ出ている様子が伺えました。全身全霊を傾けられ、終生を学院のため、教育界に捧げようとなされていた時だったのですから…

先生が最も輝いていらつしゃったのは、キリスト教協議会の議長になられた時でした。新しい肩書きが加えられた名刺を下さって「父が生きていたらとても喜んで呉れたらう」と話されました。それからの暫くは日本のキリスト教界の代表として、外国へお出掛けも多くなられました。今は形見になったお土産のペンダントが私にとって先生への思い出を深めるのです。

鎌倉の徐さんのお宅から始まった、先生を囲んでのゼミ（読書会）は、白菜の小林さん宅、目黒の岸宅と変遷を経て十五年間も続いたのでした。先生の御健康上の理由で幕を閉じましたが、その後はほんの少数の方々と共に毎月先生のお宅の一室でささやかな読書会は別の形で開かれていました。奥様亡き後の先生は、唯一この一刻を楽しみにして下さった様子、それに集う私達も御老齢とはいえずしも衰えを見せぬ旺盛な読書欲と、講義に耳を傾けておりました。

古希、喜寿、傘寿の祝会もお元気で過ごされていらしたのですが、奥様が召されてからは「死」に対して、一步一步御自分の気持ち近づけていらつしゃる様な気が致しました。しかし、その反面「生」に対しても残る力を

## 相川先生を偲んで

小林 けい

年賀状束ねて一番上に置く

先生の方 今年より無く

この新春は師を喪いて胸うちゆ

洞ぞ日増しに大きなりゆく

古ノトト頁を繰れば在りし日の

先生のみ声 蘇り来るも

（女専英一）

出し切って真正面からたち向かっている様に見受けられました。

十二月の御入院の直前に戴いた私にとって最後のお葉書には「一月の説書会に又逢いましょう」と新年を迎えられるお心の準備がしたためられてありました。クリスマスを終えたばかりの十二月二十六日電話で知らされた先生の訃報は、あまりに突然で予期せぬ出来事でした。年末の慌ただしさの中、霞ヶ丘教会で最後のお別れをしながら沢山の思い出を残して下さった先生に心から感謝を捧げ、先生から頂いた多くの教えを大切にこれから的人生を歩んでいきたいと願っております。

今、学院の女子教育が始められて、五十年の祝典のお知らせを受け、改めて先生の足跡の偉大さを思い、当時の教え子の一員であった幸せを感謝し、併せて学院の発展を祈りあげております。  
(女専家2)



相川先生の教え子であり親交のあった橄欖会員の神谷様が追悼文をお寄せ下さいました。

## 二つのケンカ

—追悼・相川先生—

神谷 量平

人の一生の前半はよき師とよき友を得るためについやさされ、その後半はその人たちを失うことに終ります。私にとってほとんどその前後全体を支配したのが先生でした。誠に「さよならだけが人生」で、もう全く何もないような気がします。私はそのことを予測して昨年八〇歳になって受洗しました。あとは共通の師イエスの弟子であるほかなかったのですが、先生は何も仰言いませんでした。多分一つは遅過ぎると思われたでしょうし、もう一つは裏切られたと感じたかも知れません。若い時分だと思えますけど、「君、死後の世界って何かあるかね？」とお訊ねになったことがあります。私は二べもなく「何もありませんよ。あると思ったら墮落ですよ。」と一言のもとに退けましたが、その時も確かに何も仰言いませんでした。

私は今でもそう思っています、受洗しました。もっと早ければ聖職の道もあったのに、

あの無神論はどうしたの？と可怪しく思ったかも知れませんが、あの世とはこの世が続いて行くことですし、この世とはあの世の規範に従うものだと思います。先生がよく「またケンカしましょう」と言った事件(？)のもう一つは戦後処理の問題で、私は内乱が必須だったと言ったのに対して、先生は「それは大変なことになるよ」。私曰く「その大変が必要だったと思います」。これも先生の追及はありませんでした。しかし先生はこの二つの沈黙が結構応えたようです。だから私の受洗はどうにも不可解だったと思いますが、先生がすべての知識について食欲であったように、私もある意味では食欲なのだと思います。

先生の見事なゲーテ的調和の一生は私の人生の前半の憧れでしたが、後半は反するものとなりました。地球上の人間の全体世界が反ゲーテ的になっていくからです。先生も晩年はそれを感じて、非常に多くの新しい考え方を模索しておられました。結局はその途上のお別れでした。キリスト教も大きく変わろうとしています。先生にはもう少し生きていて欲しかったと思います。主のお恵みの淵深らんことを…。

合掌

(一九九六・五・二〇)



## 我らは主のものなり

—小滝奎子先生の葬儀に出席して—



吉屋 保子

どんよりした

梅雨空の六月十

三日指路教会に

於て小滝奎子先

生の葬儀がしめ

やかにとり行わ

れました。たくさんの会葬者を前にしてスリー

ババーズ（文学部ができた時、平均年齢四十

七才の女性教授、松本昌子、浜田恂子、故小

滝奎子先生の三名のことを3人婆あ、スリー

ババーズと故柳生直行院長が命名したそうで

す）の松本先生、浜田先生が私達の知らなかつ

た小滝先生の文学部の教授として又、ジョー

ジ・オーウエルの研究者としての顔、学園紛

争の時、教授会になだれ込んできた学生に恐

れることなく敵とした態度で対処したことな

ど、先生のお人柄をしのばせる心温まる思い

出を話して下さいました。

私達は先生がスリーババーズの一員だった

こともはじめて知りました。又名付親が柳生

先生ということも茶目ったぶりの先生ら

しいと、うなづけるような気がします。

私達の記憶に残っている小滝先生は大きな

目をくりくりと動かして情熱的に（英文学史、

英訳）人物像やその時代を語るというタイプ

で思わず講義にひき込まれてしまったもので

す。来週からはエミリー・ブロンテの「嵐が丘」

を勉強しましょうと先生がおっしゃった時、

生徒の間でワァーという喚声があがりました。

これが私達が始めてお会いした昭和

二十七年頃だったと思います。先生の授業は

いつも満員で一番前のカブリ付きの席をとる

のが大変だった事を覚えていてます。

平成七年一月十七日に先生の最終講義に招

待を受けて釜利谷校舎の階段教室で「ジョー

ジ・オーウエルの未発表の手紙」と題する講

義が本当の意味で最後になってしまいました。

これから自由な時間ができるから私達とも

旅行もしたいし、好きな本も読みたい、自由

に研究もしたいとおっしゃっていらした先生

をイエス様は早々と天のふるりに召してしま

いました。なぜこんなに早くと恨めしく思う

のは私達人間の考える事であって主の大きいな

るご計画のもとに、み心のままになされたこ

とであり、先生は天の国のために十分な備え

ができていたからだと思っております。

ローマ人への手紙十四章七—九節

『すなわち、わたしたちのうち、だれひとり

自分のために生きる者はなく、だれひとり

自分のために死ぬ者はない。わたしたちは、

生きるのも主のために生き、死ぬのも主のた

めに死ぬ。だから生きるにしても死ぬにして

も、わたしたちは主のものなのである。なぜ

なら、キリストは、死者と生者との主となる

ために、死んで生き返られたからである。』

告別式の日、指路教会の三和紀夫牧師先生

から讚美歌も聖書もすべて小滝先生がご主人

様と二人でお選びになったものだということ

を伺いました。又先生は富士霊園にお墓も用

意され、墓石に「われ山にむかって目をあく」（詩篇第二二篇一節）と書き置かれたそうです。

先生はすべてご自分の手で天のみ国に入るた

めの準備をととのえられ、祈りながら静かに神

の時がくる日を待つていらしたのだと思います。

これは一九九五年香葉二十四号に「最終講

義を終って」というタイトルで寄稿して下さいました先生の最後の文章の一節です。

「私のはじめて教師になった頃、短大は

小さな学校で、それだけに学校全体が一つの

家族のようでした。今でも昔の卒業生の方たち

は、妹のような気がします。何より関東学

院というところは、かかわるすべての方々の

人柄がよいのです。その上に六浦も釜利谷も風景が美しく、四季それぞれを楽しむことが出来て、とても幸せでした、最終講義が終わったあと、大勢の方々から沢山の花束を頂いてびっくりしてしまふほどでした、私の人生の最高の日だったのかも知れませんが、長い間いろいろありがとうございました。小滝奎子」

先生は教師としての天命を全うされ、天国に凱旋されました。ご家族はもちろんのこと私達も此の地上でのお別れはとても寂しく悲しいものでございます。とくに先生のご主人様の上に主の豊かなお慰めと祝福がありますようにお祈りいたします。

#### 讚美歌四〇五番

かみとともにいましてゆく道をまもり、  
あめの御糧もてちからをあたえませ。

また会う日まで、また会う日まで、かみの  
まもり汝が身を離れざれ。アーメン

敬愛する小滝奎子先生、又天国でお会いする日までしばらくの間お別れをいたします。

楽しい思い出をたくさんありがとうございました。さようなら。一九九六年六月記

タイトルに指路教会三和先生の説教題「我らは主のものなり」を使わせていただきました。

(短英2)

## 小滝奎子教授の遺産

小林 守信

小滝奎子教授の文学部退官講義の日に同期の石田夫妻と階段教室にお邪魔した。最前列で James Joyce の講義を聴かせて戴いた。当日は本当に落ち着いてゆとりのある満ち足りた気分。先生と一緒に写真を撮らして戴いた。私達みたいな戦中戦後に教育を受けた経験を持つ短大生は、何故か解らないが、何処で教育を受けても、先生と生徒は2-3歳違という経験が良くあった。

略歴に依れば先生とは1歳違いであった。短大卒業後、クラスの何人かで高島台の港の見えるお宅を一度だけ訪問した。先生がフルブライトで渡米されて、ミシガンのホープ大学とNYのコネル大学から私の留学先のオハイオにお手紙を戴いたこともある。

そんなことから先生に、皆に逢いたい。と何度か書き込まれていた年賀状を数通戴いた。私は丁度、仕事で忙しかったが、何とか準備をして集まった。最初は、本牧の石田邸での集まりに、引き続いて3度ほど私たちのクラス会にお招きした。最初の時、みんなが英語を使って各方面で活躍している話を聞かれた後でこんな事があった。先生はしみじみと

皆さんは良く頑張つて、英語で一生各方面で仕事をなさいましたね、あなた方は私の妹ぐらいの年頃ですものね」と言われたのが大変印象的であった。

その後、四十年ぶりでクラスの半数以上の現住所を探しだし、毎回集まりの度に新しい人に出席してもらい先生に喜んで戴いた。

先生は戦時中に九州大学文学部で初めて入学を許された女子学生の一人として、斉藤勇教授等に対一良く仕込まれた。とうかがった。前夜祭の時に戴いた先生の略歴の中に戦時中、九大在学中に受洗された箇所を見つけて級友の一人は、これは本物の信者さんだと唸っていた。

最後に先生のお見舞いに病院に行った時は、既に昏睡状態で、その後十二時間ぐらいで昇天された。手を握つても呼びかけても反応もなくなつていらして残念でした。指路教会の葬儀に我々クラス有志から先生のお好きなお花を贈らして戴いただけでも良かった。

今年の秋のクラス会も先生に最近又やつと現住所を見つけたクラスの人々ともお話しして貰う機会が無くなり大変残念。まさに私たちは先生の教育者としての遺産なのです。

(短英11)

## 前年度講演会

講師 佐伯輝子先生

「女赤ひげといわれて十六年……」



要約 松野トシ子

まあ、何んて言われてもいいんですけど、十六年経っちゃったんですね。寿町というところを引き受けましてね。寿町というドヤ街は、わかってらっしゃるかしたら、ドヤ街だというのは分かっていらっしゃる方いらっしゃいます？ ドヤ街っていうのはね私も知らなかつたんですが、それで逆さ語なんですよね。それでドヤというのは差別用語だから（放送禁止用語）だから言っちゃいけないよね。私がドヤ街の患者さんを診察する時は「今日ドヤないんだよ」とか「ドヤ有る？」とか会話するんですけど部外者が言うとか、差別されているといわれるから言っちゃはならない。私が寿町に仕事に行って十六年経つ。その頃はまだ汚い人を見ると乞食とか、浮浪者という頭があったんですけど、そういう人達と接していると、ああ、本当は乞食じゃないんだなあって本当に思います。本当は今仕事がないから汚くもなり、浮浪者の様にもなる。全部とは言えませんが。ですから外見で判断して言葉は発してはいけません。差別用語になっていってます。

### 寿町での実例

(1) 始めに行った時、自動車から降りると、おしっこ臭いんですよ。町が。そしたらやはり五十年前の日本が戦争に負けて、アメリカ兵が軍隊というのか、占領というのか日本を接収に来た時、一番初めにアメリカ兵がこう言ったよと言うのを私は思い出します。「日本っ

て小便臭いって。飛行機から降りると臭いんですよ。私が寿町へ行っても自動車から出ると小便臭いんですよ。空気が。だからアメリカ人がそう思ったのは、別に馬鹿にしたんじゃないやなくて本当だったろうと今思いますね。下水も完備してなかったから。何んとなくフワッと日本の上が臭かったんじゃないの。寿町は今でも臭います。(2) それから私が通して思うのはね、どうして命を大切にしないかな？ 一回しかない命なのに、そんな駄目じゃん、とか言っちゃ話しますけど……。例えばと言うと、仕事が終って三階から駐車場に降りて行くんですが、ガードマンが先生ちょっと待って下さい。自動車の下をみるんです。オーライです。行って下さい。って言ったら自動車の下に寝ている人が居るの。街灯はついていないし、乗ってすぐ出發してしまえば手足を轢いてしまいます。寝る所がないとそういうところでも寝るんでしょうか。想像もつかないけど、その場になつたらそういう所を選ぶかなあって考えます。

(3) ある時、保険証の有る人が、カルテ作ってきて、私が治療して、帰って行ったのね。そうすると又その日のうちに、一、二時間したらそのカルテが来たんですよ。医者ってその人の顔が余り分からなくとも、自分が症状を聞いて治療したというとか、その人の顔が浮んで来るのね。それであれっ？ さっき来たんだなあ……と思つてふつと見たら、その人じゃないのよね。「あれっ、あなた違うんじゃない？」と言つたら「俺が本物よ」と、悪気も何もない。「さっき貸したよ」と言うから「貸しちゃいけないんだよ」と言つたら「空いているものいいじゃん」……。こんな事は、日常茶飯事、偽名も。私はこの様なことをみて感じるの、割と日本って混ぜこぜだと言うこと。区別がない。鉛筆一本。消しゴム一個。足りなきあすぐ買う。親も子も真剣に考えなければいけないと思う。私は神田の生れで、どっちかと言うと混ぜこぜ親子なのね。「お母さんいい？」というの「いいよ」「あなたなに、おやつ足りない？ いやお母さんのあげる

よ」「そう頂戴」という親子ね。親が何んでもくれるのは、親の愛情みたいなので有難くもらって。親のものは自分のもの。自分のものも自分のものというようにね。親子で当り前だったんですよ。これが結婚に依って区別することを学んだのです。寿町では混ぜこぜなんですよ。だから寿町だけじゃなくて多分日本中に優しいことよ、とか言いながら混ぜちゃっているんじゃないかと思うのよね。今度の大和銀行もすごいわね。日本はビシッと断わられたでしょ。あれがもし日本で何があっても断われないでしようね。あれだけ原爆やったんなら「フランス大使帰ってよ」って言えば良いのに。「いろんなことを考えてそういうことは言えない」って。いい意味はあるけどイエス、ノーが言えない国かなと。政治家の態度をみるとその国民なんですってね。

(4) 寿町のアル中の人が「お酒明日からやめるよ」って。あそこの人は皆「今日から」っていう人は一人もいないの。それは私にも覚えがあります。今日というのを今日覚えて下さい。お酒なんか「どうぞどうぞ」とか一気飲みとか絶対止めましょうね。日本はこれが礼儀みたいだけど、それは止めた方が良くということ。

(5) いつも来る患者さん「四十才終り位の男の人」が来てね「俺、死にたいんだけどさあ」って訴えるのね。抗うつ病になっているから、これ以上になったら精神科の方へ行かなきゃ、という人だったけれど、よく来るのですからその都度話を聞くんですが「もう俺なんか死にたい。生きていても何もならないから」。訴えなの。「駄目だよ。働かなきゃ。自分一人食うだけ働けばいいじゃん。あなた一人位、明日行ってみな、仕事に。頭が痛いのなら薬あげるから」常にこの感じ。

話題を変えるつもりで「あなたいつも毛糸の帽子かぶっているけど、どうして。」「これ取っちゃいけないっていう先生がいるから。触ってごらんっていうから触ったら、リンゴ位の骨がなくてペコペコなのね。」「どうしたの骨無いじゃん」。この人は横浜駅の東口の先

の青木橋の上から線路に飛び込んで百五十メートル位電車に引きずられて、それでも助かった人なんです。どうして飛び込んだの。と言ったら奥さんが麻薬中毒で精神病になってしまった。そのあと旦那も少しやっていたらしいのね。女房に言われてやっていたんだけど、男の子が二人いるから女房が先に精神病になり子供の教育養育をしなれば……ということまで飛び込んだら嬉しいのね。キリスト教の方で何というかわかりませんが仏教の方で「生かされた命」と言って命は、自分勝手に生きているんじゃないよ、あなた。生かされているんだって。「だって死のうと思って生きているんじゃない」って言ったのね。「生きていくということは、この世の中で、もっと何かしなきゃならないから、あなたやり足りないのよ、もっとやらなきゃならないのよ」と言ったら「だから俺にやもり出さないんだよ」。でも死のうと思っても死ねないから止めなさい。生きていけば何か良いことがあるって。それで考えてごらんなさい。これしか言うことがないの。ある時初めてニコニコして入って来たの。「どうしたの」と言ったら、俺「仕事に行っただよ」帰りに横浜駅の東口の方へ出て、「俺は仕事の帰りに時計に会っちゃって……」音楽で人形が出て来てすっかりびっくりしてショックだったらしいのね。ちょっと見たら回り階段があるのね。あそこのあるところ行くと、時計に近いなあと思っ、知らないうちにその階段を昇って行っただよって。そしたらその音楽の中から「先生の声が聞こえたんだよ」って言うの。「私何か言ったの」って言うのと「生きてな、生きてりゃ良いこともあるよ」って……。

終り

まだまだ沢山先生のお人柄が見えて来る様なお話があるのですが、私の独断と偏見で記させていただきました。地球もそこに暮らすべたのものがバランスを失いかけてる現在、先生の「生きてな」と言う言葉はとても大切なことに感じ、いつ迄も心に残った言葉であります。

(短英5)

## 林先生の叙勲をお祝いして

和田 淑子



林先生御夫妻

この度、本学名誉教授・林淳三先生が勲三等瑞宝章の叙勲の栄に浴されました。私たちにとりましても名誉なことであり、受賞を心よりお慶び申し上げます。

先生は昭和四十二年、本学に教授としてご着任以来、家政科で栄養学、食品学などをご担当になり、卒業生の皆さんの多くが先生のご指導を受けて単立ち、現在も社会で活躍しております。

林先生は短期大学長も十六年間務められ、本学が女子の総合短期大学として充実発展するために多大な貢献をなさいました。昭和四

十四年に家政科に栄養士養成を目的として食物栄養専攻を、また、幼稚園教諭や保育養成を行う幼児教育科を、さらに昭和六十二年には経営情報科を新設されるなど、本学の現在の姿は先生の学長在任中にほぼ形作られたといえます。このような先生の学内での活躍は云うまでもありませんが、学外におかれましても教育行政上、いろいろと貢献されました。全国栄養士養成施設協会常任理事を始め、日本私立短期大学協会理事、厚生省公衆衛生審議会委員、文部省大学設置審議会委員などを務められており、このような教育功労に対する受賞であるといえます。

去る六月二十九日(土)、林先生ご夫妻をお迎えして、横浜プリンスホテルにおいて祝賀会が盛大に催されました。本学の教職員はもとより、

他大学からの先生方、日本私立短大協会、日本栄養士会、全国栄養士



先生と会長

施設協会の出版関係の方々を含め学内外の多数の参加者に囲まれ、和やかなお祝いのひとときを過ごされました。祝賀会では、鈴木隆雄元東京農業大学長、青木英夫戸板短期大学理事長を始め、多くの方々から御祝辞をお受けになりました。引続いて、家政科山口教授と英文科宮川教授から記念品、花束が贈呈され、また、香葉会からも古城房子会長の手で美しい花束が奥様に贈られました。先生のにこやかでお元氣なお姿、そして奥様の笑顔がとても印象的でありました。

(家政科 科長)



参加の皆さんと

## クラス会報告

### 食物栄養専攻（昭和五十年卒業生）



山口先生の「とても素直だったあなた方が懐かしい。」という一言が、きっかけとなり、二十一年振りにかれることになった。同窓会、専業主婦である私は、久しぶりな味わい緊張感と嬉しさが、ミックスされた気持ちで出席しました。

林先生の笑顔に包まれながら三十一名、一人ひとりのスピーチが始まり、短大時代の思い出話に笑ったり、懐かしんだりしました。そして、二十年という時の流れの中、皆さん、いろいろな出来事に接し、さまざまに人生を歩んでこられたことに驚いたと共に、たくま

しささえ感じることができました。

そんな私たちの話に、一生懸命耳を傾け、うなずいて下さっていた山口先生のお顔は、まるで娘たちの成長を喜んでいるご様子であり、また一人ひとりに、「がんばっているね。私もがんばっているよ。」と声を掛けて下さっているようにも見えました。

そのようなお姿を拝見し改めて、先生方と出会えたことに喜びを感じました。きつと、先生方からご指導して頂き学び得たものは、皆さんにとつて、今では、大切な宝物ではないでしょうか。

今回の同窓会では、素敵になられた皆さんから元気をいっぱいもらい、楽しい一時を過ごすことが出来ました。

次回の同窓会では、キラキラ輝いているおばさんになって、お会いしたいですね。

頼りない幹事でありましたが、林先生・山口先生、ご出席下さって、三十一名の皆様のご協力によって、和やかな会になり、本当にありがとうございます。この場をお借りして御礼申し上げます。

於 横浜東急ホテル 孔雀庁

平成七年十一月十九日(日)

石坂由美孝(家24)

### 英文科七回生（昭33卒）のクラス会

一九九六年四月十三日(土)、小玉敏子先生をお迎えして、逗子マリナーナのレストラン・セゾンでクラス会が開かれ、同期生三十四名中十八名が出席しました。七名から病氣、怪我、遠方、他の会合、仕事等の事情で欠席の返事がありました。

中学教

師、会社員、自宅

で学習塾を開いている人、主婦などが、それぞれ自分の経験や趣味などを披露しました。



卒業後はいじめて小森さん(全盲の桜美林短大教授の夫人)がご主人と共に出席されました。お二人の信仰と人生観、そして「二人で一人の生活」には皆深い感動を覚えました。全員が仕事、老いた親の看護、子供、自分の老後のことなど、さまざまな問題

を抱えているのですが、しばし学生時代にタイムスリップできた楽しいひとときでした。小玉先生には久しぶりにご出席いただき、短大の近況を伺いました。古い粗末な木造の校舎ではありましたが、短大生として過ごしたあの二年間は、私たちの人生において貴重な充実した年月であったと、今あらためて思います。

古野祐子（英7）

## 五月会



初夏を思わせるような五月二十四日、かねてより巷の噂にのぼる恵比寿ガーデンプレイ

ス内 ガーデンプレイスタワー館三十八階・旭館にて、英文科第二回卒業生の五月会が開催されました。当日は二十一名の方が遠くは島根県、奈良県から出席しました。この中には卒業以来初めて出席したと云うのにタイムスリップしたような楽しいひとときを過ごしました。積もる話に花が咲き、二時間の予定が場所を喫茶店に移し、四時間になりましたのにもっと時間があつたらと云うお声を聞かれる程でございました。用意したカレッシュソングを唄う間もなく、それぞれ主婦業に戻って行かれました。

石桶花が美しく咲いていたガーデンプレイスでの五月会でございました。

幹事 菅原千代子（短英2）

影山 直子（ク）

## 英II部クラス会

平成七年九月十五日、中華街「赤い宝石」で小滝・上市先生をお迎えして、卒業後三回目の会合を持った。中村（武）兄の全国・地方別電話番号帖による、現住所の検索の結果、合計十七名参加。転勤の多かった長谷川兄、関西地震被災の井上兄、教会活動で忙しい竹

内姉、NECで活躍中の門井兄、帝京短大の特任教授の中村（八）兄等の初めての参加の方を含み、小滝先生との最後の集りになる。

（小林）



## 国文科三十周年の集い 御案内

記

いつのまにか、秋の気配の感じられるこの頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、先日ご案内致しました、国文科開設三十周年の式典と記念の集い、いよいよ来月に迫って参りました。

国文科は、一九六六（昭四一）年に開設されて以来、現在までに四千名に近い学生を送りだして参りました。卒業生の皆さんが、家庭に、職場に、それぞれの分野で活躍し、国文科で学んだものを生かしていらっしゃるのには羨ましい限りです。決して派手ではないが、着実にじっくりと自分をつつめ、自分の人生を大切なものとして生きていく、というのが国文科の個性とっていいかもしれませぬ。

卒業生の皆さんが、母校に集まり、過ぎた日のことを回顧しながら旧交を温め、かつての先生方とも歓談し、明日への英気を養う、そういう場として、今回の催しを企画したしいです。三十年目にして初めての機会ですのので、どうかお誘い合せのうえ御参集下さいませよう、改めて御案内申し上げます。

なお、当日の予定は左記の通りです。

一、日時 一九九六年十月十九日（土）

午後一時～四時

二、場所 関東学院女子短期大学内チャペル

午後一時 式典

三、内容 岡松和夫先生記念講演

・パイプオルガン演奏会

午後三時 祝賀会

（会場は四号館食堂・協力／東急ホテル）

午後四時 閉会

（希望者は学内見学）

四、会費 四千五百円

※ 会の出席申込期限は過ぎています

おりますが、ご出席いただける方は左記へご一報下さい。

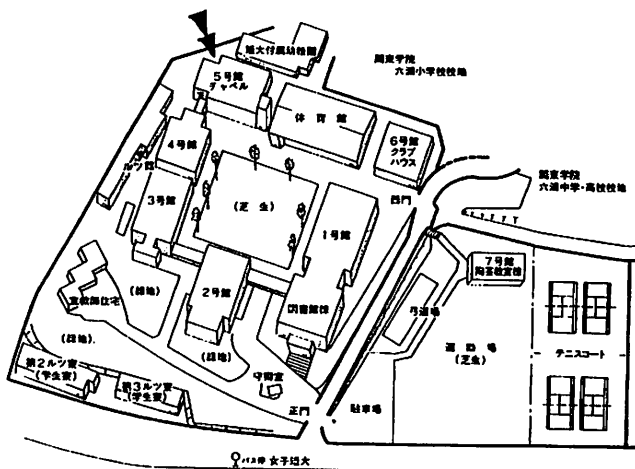
〈連絡先〉 関東学院短期大学

国文科研究室

☎〇四五（七八七）七八八三

〒〇四五（七八七）七八八三

## 会場案内図





## 第四回奨学生

今年は四人の留学生（中国二名・台湾・韓国）に奨学金を差しあげました。国文科の卒業生の齊恰さんよりお礼のお手紙をいただきました。

齊 恰

二年間、ありがとうございました。

このみじかい二年のあいだ、日本文化にはなにも知らないから、漸々、日本文学に興味を生きました。とくに、近代文学。たとえば、夏目漱石、川端康成、三島由紀夫など、有名な文学者の作品、私は本当に愛読者です。古代文学がすごくわかりにくいので、先生たちは何回も何回も外国人の私にむずかしいところを講解し、朗読しました。試験の前、「何かわからないところがあれば、えんりよしないで、きいてください。」と、いつもあたたかい声を出しました。

外国人として、日本で生活が、率直に言えば、本当にたいへんです。家賃とか、生活費、学費などたかいですから。日本政府から、また学校の香葉会から、一ヶ月何まん円の奨学金をもらえて、私の幸いだと思っています。助かりました。ありがとうございます。

これから、北京にかえって、就職します。日本、日本語と直接関係がある会社、企業などはいろいろあります。せっかく日本で日本語を習って、できた日本語を仕事の中に生かしたいと考えてます。

また日本に来られたらいいなあと思う。とりあえず、自分のためにもっともつとがんばります。

（短国29）

## 事務局日記

昨年より、事務局がルツ館の二階に変わり、事務局員も葛城容子・益 昌子・岡崎敬子の三人で仲良く毎日の仕事に追われています。ここで事務局のプロフィールなど。



益 昌子 香葉会の事務局のベテラン（古顔）。新米の良き助言者です。同窓会の基本である名簿チェックには細部まで目を光らせています。



岡崎 敬子 一時、国文科の研究室でお手伝いをしていたので知っている方も？まだまだ新米です。一粒種の坊や!!（十八才）の母親。



葛城 容子 香葉会とおつきあいは〇〇年。でも事務局では新（？）米です。気はやさしくて力もち。明るく・楽しく香葉会をめざしています。

月曜日から金曜日。三人のうち誰かが事務室にいる予定です。同窓会・クラス会等、氏名・住所の変更など、手紙・電話（ファクス兼用）でお待ちしております。時間のできた同窓生の皆さん！たまには香葉会へ遊びにいらっしやいませんか？ 熱烈歓迎いたします。

## 県央のつどい

「良き出合いを求めて」

高田 喜八



香葉会の皆さん、こんにちはわ！ どちらさまも御壮健であれば誠に幸いです。

さて、私は昭和四十二年の経済学部卒の高田喜八と申します。学部卒ですの

で。その私が何故、香葉会誌に寄稿する事になったのが、今回の不思議であります。謎ときではありませんが、特に神奈川県県央地区にいらっしゃる方は、まあ聞いて下さい。

私達は昭和五十六年より関東学院の同窓会

の県央支部を作ろうという事になりました。当初は燦葉会の支部作りを当然の事と考えておりましたが、当時の経済学部の清水忠直教授が厚木在住であった為に特別に御指導を賜りました。

その中で、関東学院の特徴は数々あれど、その一つに短大の併設がある。そこで、この県央地区の同窓会作りは、学部・短大合同のスタイルはどうだろうか！という提案を頂いた訳です。即ちオール関東学院の県央地区の集いという事になりました。

形式としては、各々の、即ち燦葉会の県央支部の総会と、香葉会の県央地区懇談会を開催し、引き統いて合同の『関東学院 燦葉会・香葉会 県央のつどい』を催行する。という事になった訳です。

昭和五十七年、第一回の開催に漕ぎ着けました。学部からは高野理事長、短大からは、こちらも故人になられた柳生先生等、燦葉会・香葉会の各々会長・役員多数出席を頂いたものです。以来、それこそ苦節十四年を数えております。

さて、今回のお話の主旨ですが香葉会の皆様にもう少しこの同窓会の地域活動に御理解を頂き、それぞれの御縁を良く生かせるオ

ル関東学院人間関係ネットワーク作りに参加致しませんか？というお誘いでありませう。

私は少し生意気かも知れませんが、人間、生きて行く上で、この『縁』というものがとても大切だと思っています。そして、この縁の中でも『出合い』ほど人の運命にまで大きなインパクトと影響を与えるものはないのではないのでしょうか！これは私の持論ですが、人の幸・不幸も出合いによって決定されると思っています。何故ならば、良く見て下さい。幸せそうに暮らしている人は、その人の本質もさる事ながら、実は良き出合いに恵まれている事が決定的なファクターになっています。

逆に良き出合いに恵まれない人は、あまり幸せになれそうもありません。

それでは、良き出合いに恵まれるという事は偶然なのでしょうか？ここが大切な所です。私の見る所、偶然もあるでしょうが、その何倍か、何十倍か、場合によっては何百倍かの必然性があるように思われるのです。それは何でしょうか？皆様も良く観察してみてください。それは、良き出合いに恵まれる人の必然性の根拠は『出合いを大切にしている』事のように思われます。大切にしているから一つ一つの出合いをしっかりと見つけます。です

から良き出会いをしつかりと捕えて、大きく育てる事が出来るのです。

そうでない人は、ぞんざいに扱いますから磨けばダイヤモンドのように輝く出会いでも平気で見過ごしてしまうのです。

ところで幸運の神様の名前を御存知ですか？その名前は『チャンス』といい、どうやら女神のようです。姿・形が変わっていて、頭の髪が前の方はフサフサで豊かですが、後頭部はハゲているそうです。また、着物も体の前の部分はケサのようなもので覆っているのですが、体の後の方は何も着ていないそうです。即ち、この幸運の女神は前から来た時のみ、髪も毛でも、着ている物でも、つかまえて幸運を自分のものと出来ませんが、一度通りすぎてしまうと、頭はツルツルバゲで申し、体も身につけている物が無いので非常に捕まえていくというたとえです。

申し上げたい事は、良い生き方を求めるならば『出会い』を大切にすることと『前向きな積極性』が必要ではないでしょうか！

私達は、幸いにして、関東学院という同窓を持つ出会いがあります。この出会いという『縁』を積極的に良き『人間関係ネットワーク』に活かそうではありませんか！そして考

えてみれば、良き人間関係作りが、良き人生の必要欠くべからざるものである事はいうまでもありません。

同じ学窓を持つという事は不思議なものです。初対面でもすぐ親しみを持つ事が出来ます。

これが縁ある事だと思ふのです。私達は、一生懸命この『県央の集い』を楽しく継続しようと努力しております。必ずアトラクションも一つ以上工夫して賑わいを作っております。しかし何より大切な事は一人でも多く御参加者があるかどうかという事です。

今年も平成八年十一月十六日(土)午後五時三十分より厚木ロイヤル・パーク・ホテルに於て恒例の懇談会と『第十六回県央のつどい』パーティーを開催致します。

どうか、手弁当でこの出会いの場を継承している私達の思いも少し御理解頂いて、今年も例年になく盛り上がりたものになりますよう御期待申し上げます！それでは良き出会いを大切に出来ますように、そして御健勝を御祈念申し上げます、『関東学院県央のつどい』へのお誘いの御挨拶と致します。御精読ありがとうございました。

(県央支部会長)

## 合同同窓会報告

平成八年七月四日(木)相生本店に於いて関東学院合同同窓会代議員(総会)が開催されました。学校側からは、内藤理事長・石田院長・鴻池大学学長・小玉短大学長・平塚校長・永野校長が出席され、学内の現況をお話しされました。各部会の報告事項をし、議長として、燦葉会から山内さん、書記として、燦葉会から岩崎さん、植村さんが選出され平成七年度の事業報告・決算報告を受け承認されました。審議事項に入り、平成八年度事業計画・予算等満場一致で決議され、今年度がスタートいたしました。総会は規約によると六月末までに行わなければならないのですが理事会和重なったので、代議員の承認により七月になりました。四期十二年の永い間会長として、御尽力いただいた六葉会の田野井会長が退任し、新会長に燦葉会の坂田会長が選出されました。合同同窓会の新たな発展に期待し、皆様の御協力をお願いいたします。

(相吉典子記)

## 母校ニュース

△新任教職員紹介△

柳瀬 昌弘先生



家政科 教授（特約）  
公衆衛生学・栄養学特  
論担当  
横浜市立大学医学部卒  
業

前聖マリアンヌ医科大  
学助教授

大澤麻衣子さん



入試広報課 事務職員  
関東学院大学文学部  
平成八年三月卒業

## ▽新学長に吉田博教授就任

小玉敏子前学



長の任期満了に  
伴い、平成八年  
九月一日から四  
年間の任期で家  
政科教授吉田博

先生が就任されました。

吉田博教授は昭和四十四年、短期大学家政科に奉職。昭和六十二年に教授になられました。学内では食物栄養専攻主任、生活文化専攻就任を務められ、平成三年から平成七年三月まで学生生活部長として活躍されました。昭和二十年生まれ。東京農業大学を昭和四十二年にご卒業され、同大学大学院修士課程修了。昭和六十一年には農学博士となられました。

尚、学長就任式は平成八年九月二日（月）関東学院大学チャペルに於いて挙行されました。



## 編集後記

創立五十周年記念号として、今年には盛りだくさんの記事や写真を掲載させていただきました。相川先生・兵藤先生・小滝先生と創立からの先生方が永眠され歴史の流れを感じさせる年となりました。女専のページの拡大として先輩の皆様から多数の原稿をいただきありがとうございます。増大ページとなり、会員の皆様よりの原稿を今まで以上に掲載できたいと思います。

学校からは、昔の写真・林先生の叙勲祝等の写真を拝借いたしました。なつかしい写真等多数ありましたが、誌面の関係上限りがありますので、お許し下さい。編集委員も人数を増やし、三十号に向かって頑張っていきたいと思っております。会員皆様の御協力をよろしく願っています。

今回の原稿等を楽しみにしております。

「香葉室」「訪問記」等  
休載いたしました。



平成7年度決算				平成8年度予算
収入の部	予 算	決 算	増 減	予 算
会 費	(@18,000×931) 16,758,000	16,758,000	0	(@18,000×902) 16,236,000
賛 助 金	500,000	800,187	300,187	500,000
預 金 利 息	5,000	4,201	△ 799	5,000
雑 収 入	5,000	112,250	107,250	5,000
前年度繰越金	4,340,776	4,340,776	0	3,805,344
合 計	21,608,776	22,015,414	406,638	20,551,344

支出の部	予 算	決 算	増 減	予 算
通 信 費	3,000,000	1,803,714	1,196,286	4,000,000
印刷・製本費	2,000,000	1,759,096	240,904	2,000,000
総会・会合費	2,200,000	1,796,289	403,711	2,200,000
交 通 費	500,000	281,790	218,210	500,000
用 品 費	1,200,000	1,172,673	27,327	100,000
委 託 費	500,000	733,733	△ 233,733	700,000
謝 礼 費	100,000	102,935	△ 2,935	100,000
消 耗 品 費	100,000	43,939	56,061	100,000
人 件 費	3,000,000	2,587,125	412,875	3,000,000
合同同窓会分担金	(@300×931) 279,300	279,300	0	(@300×902) 270,600
新入会員歓迎費	1,500,000	1,355,480	144,520	1,500,000
慶 弔 費	700,000	335,080	364,920	1,000,000
寄 付 金	200,000	200,000	0	200,000
雑 費	29,476	7,596	21,880	80,744
予 備 費	800,000	251,320	548,680	800,000
特 別 会 計	2,500,000	2,500,000	0	2,000,000
名簿発行準備金	1,000,000	1,000,000	0	0
奨 学 金 基 金	2,000,000	2,000,000	0	2,000,000
( 小 計 )	21,608,776	18,210,070	3,398,706	
次年度繰越金	0	3,805,344	△ 3,805,344	
合 計	21,608,776	22,015,414	△ 406,638	20,551,344

賛助金をご寄付くださった方へのお礼とお願ひ

今年も後記の方々から総額「八十万百八七円」をお送り頂き、厚く御礼申し上げます。諸物価の値上げにより、年々「香葉」の発行がむずかしくなっておりますが、卒業生唯一の雑誌を存続したいと、編集委員一同がんばっておりますので、今後共賛助金のご協力をよろしくお願ひ致します。

一九九五年度賛助金寄付者(敬称略)

- |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |         |        |      |      |       |       |                      |      |       |      |      |      |       |      |
|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|------|---------|--------|------|------|-------|-------|----------------------|------|-------|------|------|------|-------|------|
| 梅田玲子 | 劍持敏江 | 松浦きぬ江 | 田中久恵 | 澄谷亮子 | 井上真紀 | 中野ノブ子 | 葛城容子 | 西村文夫 | 藤原具子 | 石塚千恵子 | 上倉幸代 | 松本佳子 | 木村輝子 | 武田由紀子 | 三浦愛子 | 林田富子 | 藤代英子 | 高橋美佐子 | 玉木宮子 | 安念和美 | 石塚優子 | 飯塚まり子 | 岸 尚子 | 桐原千恵 | 森 慎子 | 久光とも子 | 田辺和子 | 岡田温子 | 鈴木清子 | 濱田二三栄 | 広瀬啓子 | 伊藤綾子 | 荻原幸枝 | 高斎香代子 | 渡部直子 | 露木球恵 | 長崎洋子 | 椿原千佳子 | 高橋洋子 | 岡崎淑子 | 中里玲子 | 清田恵美子 | 田村紘子 | 出野可子 | 栗林芳恵 | 江浪戸房子 | 芝 久江 | 高橋静子 | 古城房子 | 吉原千恵子 | 白澤智子 | 濱中景子 | 依田仁子 | 五十嵐節子 | 徳江奈美 | 徳江美和 | 山崎裕子 | 白石真砂子 | 畠塚恵子 | 松野文字 | 岩沢克恵 | 石田不二子 | 臼田修良 |      |      |       |      |      |      |       |      |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |       |       |      |      |         |        |      |      |       |       |                      |      |       |      |      |      |       |      |
| 鈴木弥生 | 鈴木久恵 | 森野惠理子 | 積田昌子 | 吉田澄子 | 稲垣愛子 | 肆矢三佐子 | 横山涼子 | 岸 澄子 | 佐藤恭子 | 祖父江有加 | 西本素子 | 渡辺芽子 | 植松弘子 | 工藤ひろみ | 神部映妙 | 齊藤節子 | 福井英子 | 福田世紀子 | 森 静恵 | 権田嗣夫 | 土岐房子 | 芦部九女夫 | 勝見修子 | 松井順子 | 平田恵子 | 土岐美智子 | 小出政子 | 細田節子 | 原嶋曜子 | 曾我かおる | 富田欣一 | 杉山愛子 | 安藤弘子 | 浅見トヨ子 | 高山政子 | 和知章子 | 大川幸子 | 小林三恵子 | 篠原仁美 | 鈴木美穂 | 鈴木照子 | 梅山フク江 | 富里美子 | 徐多恵子 | 佐藤文字 | 小出美智子 | 佐藤圭子 | 小峰節子 | 栗山裕子 | 福田しほり | 鈴木清子 | 福崎浩子 | 須田廣子 | 吉田由美子 | 増田京子 | 三沢栗子 | 寺内雅子 | 佐々木晶美 | 村田芳子 | 永井 薫 | 辺見裕子 | 大石豊代子 | 佐藤薔薇 | 古屋智美 | 須藤和子 | 五高加代子 | 光畑 清 | 川上妙子 | 田牧洋子 | 細田喜久子 | 中村恵子 | 山本美子 | 矢田宏子 | 高瀬巴奈子 | 川島久里  | 鈴木迪子 | 保科恭子 | 谷田部敦子 | 高橋秀子  | 菅野富子 | 井田玲子 | 五十嵐栄江 | 山口周子  | 水野 緑 | 古郡綾子 | 田九留美子 | 佐藤久子  | 熊谷君代 | 丸山勝代 | 中村紀佐子 | 平井道子  | 小濱朝子 | 吉田年江 | 山内奈緒子 | 松村良江  | 瀧美裕子 | 平関敦子 | 佐藤恵利子   | 馬渡正恵   | 西東順子 | タハ 茜 | 西村麻由子 | 蔵登喜子  | 梅山治子                 | 伊藤陽子 | 山口はるみ | 長崎 薫 | 菊地和子 | 江崎京子 | 戸谷しげり | 洲上龍美 |
| 越智協子 | 松永政江 | 宵木千恵子 | 斉藤一恵 | 鶴見智子 | 中川あや | 山田せつ子 | 牧野眞澄 | 土屋明子 | 安達和子 | 井上多恵子 | 中西愛子 | 大谷和子 | 安彦潤子 | 鈴木恵美子 | 吉屋保子 | 柳生二三 | 高橋容子 | 持田しげ代 | 尾川昌子 | 辰沼滋子 | 重田和子 | 千川奈緒美 | 織田明美 | 相原海子 | 相川澄子 | 馬屋原麻里 | 森 晴代 | 加藤雪枝 | 大島好恵 | 石垣孝太郎 | 石田慎子 | 飯田染子 | 山崎恵子 | 竹内恵美子 | 村井英子 | 渋谷貴子 | 明石昌子 | 宵木昭二郎 | 工藤和子 | 朱雀涼子 | 雨宮慶子 | 長谷川伸一 | 関根幸子 | 中村八朗 | 中村武雄 | 小林寿恵子 | 小林守信 | 井上春水 | 門井正弘 | 柳田美智保 | 新井三郎 | 稲田 博 | 土山 忠 | 菅原千代子 | 服部道子 | 石田道博 | 鈴木利治 | 山口恵美子 | 出栄美子 | 村岡愛子 | 関 令子 | 加来真千子 | 山本義生 | 保田 幸 | 千田節男 | 小林サエ子 | 山本義生 | 松田初枝 | 内田康子 | 岩野由美子 | 松田良子 | 岡崎敦子 | 渥美裕子 | 平尾富子  | 長慶寺千穂 | 加藤和子 | 飯島敏子 | 松上尊代  | 後藤美和子 | 月本鈴子 | 勝又清子 | 松上尊代  | 後藤美和子 | 月本鈴子 | 外山京子 | 岩瀬信子  | 喜多村光江 | 篠原愛子 | 内田晴子 | 鈴木育子  | 三野宮恭子 | 西村恵子 | 内田駒子 | 石渡朝子  | 斉藤伊希子 | 長柄智子 | 古賀恵子 | リーディイ質子 | 馬屋原有利子 | 荒田三帆 | 酒田匡子 | 相吉典子  | 錦織マサ子 | 長谷川不二恵(一九九六・三・三十一日迄) |      |       |      |      |      |       |      |



## 先輩諸姉へ求人のお願い

本学卒業予定者の就職活動につきましては平素より暖かなご援助、ご協力をいただき感謝申し上げます。

学生達は将来への希望を胸に企業の扉をたたいておりますが、昨今の社会情勢の中、女子学生への門戸は大変厳しいものになっております。

つきましては、先輩方のご関係で求人のお話がございましたら就職課へぜひお知らせくださいますようお願い申し上げます。

〒236 横浜市金沢区六浦町4834 Tel (045) 787-7868  
関東学院女子短期大学就職課 Fax (045) 781-1491

## 香葉 第 25 号

---

平成8年10月1日 印刷・発行  
関東学院女子短期大学・香葉会  
代表者 古城 房子  
横浜市金沢区六浦町4834 郵便番号236  
関東学院女子短期大学内  
Tel・Fax (045) 787-7859

---

関東学院同窓会・香葉会誌